日本よ、今、闘論！倒論！討論！２０２５

第９１４回 危機の日本が直面する諸問題

R7/6/17

パネリスト：

石田和靖（国際情勢 YouTuber“越境 3.0 チャンネル”）

稲垣ひでや（新党くにもり関西代表）※リモート出演

杉山大志（キヤノングローバル戦略研究所 研究主幹）

鈴木傾城（作家・アルファブロガー）

鈴木宣弘（東京大学大学院教授）※リモート出演

用田和仁（元陸上自衛隊西部方面総監 陸将）

司会：水島総

＊＊＊＊＊＊

水島「皆さん、今晩は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！２０２５第９１４回目の討論となります。今日は、皆さん、ご存知の様にイスラエルとイランが戦争状態に入っていると。これから拡大するかどうかは色んな言い方があります。そして、特に印象が深かったのは、最高指導者のハメネイ師を暗殺できると言ったらトランプさんがとめましたという様なことがありましたけど、極めて計画的にイスラエルが、もう何年も前からイラン国内に様々なミサイル受信装置的なものとか、或いは工作員を使って、あっと言う間に参謀総長や革命防衛隊のトップや２０人以上の軍の幹部、そして核物理学者も６人ぐらいを殺したということですね。そして、今、テヘランの制空権を持つようになったと。極めて元々周到に戦争を狙っていたという。

そしてガザの、あぁいう紛争と言うか虐殺事件も、ある種のステップに過ぎなかったというようなことですね。あれでハマスやヒズボラを壊滅させて、反撃を食い止める。つまり、本体はイランであった。こういうようなことが、段々浮かび上がって来ているのではないかと。今日は石田さんのように中東のことを色々ご存知の方や、皆さんを含めまして、今、日本が直面している危機の問題について話をしたいと思います。

そういう中では、特に農業問題、何か小泉純一郎ジュニアの小泉進次郎が出て来まして、何かどんどん安くしてっていうようなことで行動力あるなぁ、今や産経新聞のアンケートをとると、首相候補トップになっちゃったっていうことでね。丁度、原口一博さんもケガをしたということで入院なさって、この前、丁度、先週、出て貰ったんですけど、古古古米５キロ８３円だっていうようなことまで全部、暴露していましたけど、ちょっとケガを為さったということがありまして、ちょっと政治活動が少しストップするみたいな状況になっているようでございます。

そういう中で、一時間目は、特に日本の国内の問題、小泉さんの問題、石破さんの問題、日米会談が開かれましたけども、結局、具体的には動いていないんじゃないかと。それから、今言った農業問題ですね。米の問題。明らかになった食糧安保の問題、こういったことも含めてやっていきたいと思います。

では出席の皆さんをご紹介します。まず元陸上自衛隊西部方面総監、陸将の用田和仁さんです。宜しくお願いします」

用田「宜しくお願いします」

水島「作家でアルファブロガー、鈴木傾城さんです。宜しくお願いします」

鈴木（傾）「宜しくお願いします」

水島「キャノングローバル戦略研究所研究主幹、杉山大志さんです。宜しくお願いします」

杉山「宜しくお願いします」

水島「国際情勢 YouTuber“越境３．０チャンネル”石田和靖さんです。宜しくお願いします」

石田「宜しくお願いしまぁす」

水島「そして、今日、スカイプのご出演はお二人です。まず、東京大学大学院（農学生命科学研究科）教授の鈴木宜弘さんです。宜しくお願いします」

鈴木（宜）「宜しくお願いします」

水島「はい。そして新党くにもり関西代表の稲垣ひでやさんです。宜しくお願いします」

稲垣「はい。宜しくお願いします」

水島「今日は、このメンバーで色んな意味で噴出している問題を議論したいと思います。今日、ご出演の鈴木宜弘さんは用事がありまして、１時間ぐらいしか居られないので、１時間目は農業問題を中心に話し合いたいと思います。まず、鈴木（宜）さん、お忙しいところを有難うございます」

鈴木（宜）「はい」

水島「今、米の問題が出ていまして、小泉さんが非常に行動力を持ってやっているというようなことがあって、我々は苦笑しているところもあるんですけども、今、日本のおかれている農業問題、これ迄も何度もご出演戴いて話して下さいましたけど、ここにある危機というのは今、外米と言うか輸入とか色んなものを含めて、日本の農業自体が危機になっているんじゃないかっていうところが中心だと思うんですけど、初めての方も多いと思うので、その今の日本の農業問題の概略をお話し戴けますか」

鈴木（宜）「はい。そうですね。今、日本の農業の状況は、私も毎日のように全国の現場を回っていますけども、あと５年以内に、ここで米を作れる人が、もう居なくなると。農業をやる人が居なくなるよと」

水島「はい」

鈴木（宜）「ここは、もう５年ぐらいで人が住めなくなってくるんだと。そのような地域が山のように続出して来ております」

水島「はい」

鈴木（宜）「ですので、もう本当に正念場を迎えている中で、この日本の食糧を何とか確保して日本の農業を何とか持続できるように出来るかどうか、本当に今、早急な政策というのが求められている訳ですけども、それが放置されていると」

水島「はい」

鈴木（宜）「むしろ小泉進次郎さんが出て来て、今、皆さん、小泉劇場で惑わされていますが、とにかく高くなったお米の値段が下がった、下がったということで、皆さん、評価しておられるようですけども、これですねぇ、確かにスピード感を持って頑張っておられます。相当、無理をして安い価格で特定の業者さんだけに流すということで、何とか、安いお米を実現したという演出は出来ていますが、更にジャブジャブに価格を下げていって、輸入米もどんどん入れて行くんだみたいな議論になっていますよね」

水島「そうですよ。そこですね」

鈴木（宜）「えぇえぇ。この農村現場が根本的に疲弊して作れる人が、もう居なくなってきているっていう状況で、ただお米の値段を下げればいいという議論だけを先行させてやっ

てしまったら、今も３０年前の米価にやっと戻って何とかギリギリ一息ついているだけの米農家の皆さんね、そこまで安いお米の値段に、また、どんどんしていくというんであれば、更にね、もうやめるよという方がどんどん増える、そういう不安が広がっています。

更に、そこに今度は輸入米を入れていくんだと。正にトランプ関税で脅されて、日本は、国防の要である米、日本人の命の要、日本の地域、コミュニティを守る要である米までも差し出すかのような状況を今、作ってしまおうとしている訳ですから、もし、そうなって来たら本当に大規模も小規模も、もう、お米を作れる人が居なくなりますよ」

水島「そうですね」

鈴木（宜）「そういう風に今、正に進めてしまっても、じゃあ、それで輸入米だけに頼って生きて行けるのかと」

水島「うん」

鈴木（宜）「米の自給率は唯一、１００％近く保って来た、その最後の砦まで輸入に頼って自給率が極端に下がれば、私達は本当に海外からものを止められる。海上封鎖とかされたら一気に餓死して、日本そのものが、もう滅びてしまうような状況を、自ら、つくり出そうとしている可能性があるっていうことです」

水島「そうですね」

鈴木（宜）「これは本当に危機が増幅されているというような状況ですが、今、本来であれば価格を下げるのをスピード感でもってやるというならば、それと同時に、じゃあ、増産して価格が下がったら、それでも農家が続けられるだけの政策を稲作のビジョンというものがスピード感を持って示されなきゃいけないのに、それには何か先送り状態になっていて皆が不安になっていると。

しかも、その農村現場は減反政策で、米を減らし過ぎて、且つ、みんなが時給１０円というような赤字に追い込まれて、これ以上、作れないと言っているのに、米は充分あるんだ、足りているんだというね、その主張を未だ変えていなくて、悪いのは流通と農協だとＪＡだという攻撃を逆に、また強めて来ていますよね」

水島「そうですねぇ」

鈴木（宜）「正にＪＡに対する攻撃が更に強まって来たということは、一部で言われている様に、小泉進次郎さんは以前、自民党の農林部会長の時に農協改革という名目で、この農林中金、それから全共連」

水島「はい」

鈴木（宜）「農林中金に集まっている預金の運用資金だけで１００兆円」

水島「はい」

鈴木（宜）「それから全共連に集まっている共済の方の５５兆円」

水島「うん」

鈴木（宜）「１５５兆円を、正にアメリカの金融保険業界が運用できるようにして欲しいと

言っていると。小泉純一郎さんの時に郵政改革で３５０兆円の運用資金を差し出していく流れが出来て、それを今度はＪＡマネーだと。それが未だ、この前、やり遂げられてないから今回、それをやり遂げる大きなチャンスが来たんじゃないかと」

水島「うん」

鈴木（宜）「それから、もう一つは全農の株式会社化も前から言われていますけども、アメリカの巨大穀物商社、カーギルが全農を買収したいと。でも全農は協同組合なので買収できないから株式会社化してくれという要請があって、それも未だ実現していませんので、それが今回の農協攻撃の一介として、更に、そういう状況が出来れば、正に日本の農産物の要である全農が外資に売り渡されるという風な状況も進む可能性もあるということになりますと、正に日本が売られていくようなね、そういうことも、もう一つ、ここに大きく出て来ていますので…」」

水島「そうですね」

鈴木（宜）「そういう意味で、今の状況っていうのは、本当に危険な要素が、更に深まって来ている状況じゃないかと心配しております」

水島「おっしゃる通りですね。鈴木さんね、今、言った農協マネーというか、これも郵政民営化と同じようなパターンがやられようとしているという、本当によく解るんですけども、それと、もう一つ、あまり伝わっていないんですけど、先進国は個別補償というか、農家に対するものを、結構、６割、７割、８割、大きな所だと１１０％以上、個別補償をやっているじゃないですか」

鈴木（宜）「えぇ」

水島「米の値段を自由競争の形でやったら、それはやっていけないのが当たり前だっていう気がするんですよねぇ。他の国、先進国は、みんな、そういう個別補償をやっているんですよね」

鈴木（宜）「はい、そうですね。おっしゃる通りですね」

水島「はい」

鈴木（宜）「ヨーロッパでは、ほぼ所得の１００％近く、或いは１００％を超える様な補助金で所得が支えられているという状態になっている。日本は、平均でも農業所得に占める税金の割合は３割ですね」

水島「うん」

鈴木（宜）「先進国でも突出して低い訳ですよね」

水島「そうですよねぇ」

鈴木（宜）「そういう点でも、日本農業が過保護に守られているというようなことを言う人が今でも居ますが、それは全くの逆だということですよね。しかも本当に過保護で守られているなら、どうして時給が１０円というような状況になるのか」

水島「そうですよね」

鈴木（宜）「そして平均年齢が７０歳になって担い手が不足して、これだけ耕作放棄地が増えて来ていると、もうね、どんどんやめる人が増えているのに、何処が過保護で守られているのかっていうね、そういう事実だけとっても、これは間違いだと解りますし、そうやって先進国が、しっかりと国防として農業を支えていると。

正に命を守る要の食糧としての国防と、それから、しっかりと国境を守る大事な産業として農林水産業を国防として支えるというね、これは世界の常識ですよ。それなのに日本だけが、それをおかしなことかのように国民が思わされて来た。そして日本の農業が一番、過保護だなんていうね、逆にマインドコントロールをされて来たということが非常に今の危機を招いた要因だと思います」

水島「そうですね」

鈴木（宜）「その点もね、誤解を脱することも含めて、やはり、きちんと他の国と同じような形で国防の要としての米、農業を守ることの重要性を、しっかりと認識しなきゃいけないと思うんですよね。

それから総理は２００９年、農水大臣だった時に、今、おっしゃったようなヨーロッパ型、或いはアメリカ型の所得補償ですね。農家の赤字を埋める政策については、私の著書もベースにして戴いて、生産調整、減反をやめる代わりに増産して価格が下がったら、これは商社が助かると。ただ農家には直接支払いをすることで農家の所得を支えることで、商社と農家の両方が持続できるようにして食糧安全保障を確立すると。

まず、そういう形で、しっかりと米農家も継続できるように、消費者も米を安く買えるようにする政策をやるんだということで、一度、２００９年９月１５日に石破プランとして発表されているんですよね」

水島「うん」

鈴木（宜）「それで、今回、総理になられてから、その議論が今も出て来なくなっていましたけれども、今度、また前の農水改革閣僚会合で、前回も２００９年に創って、私もアドバイザリー・メンバーで、その時には参加していたんですけども、そういうものを、もう一度、再開するということも言われて、これから議論を始めると言うんですが、農水改革の議論が終わるのは、２０２７年とか言っておられる訳ですよ」

水島「ねぇ、何を言っているんだっていうねぇ」

鈴木（宜）「それじゃあ、もう、もたない訳ですよ」

水島「全くそうですよねぇ」

鈴木（宜）「今、直ぐやらなければ、現場が安心して米の増産が出来ない。今、米を、きちんと作れるようにしなければ、米不足の根本が解決できないんだけれども、そっちが放置されているということと、それと、もう一つは、今、皆さんは口を開けば、もう猫も杓子もじゃないけれども補助をする、サポートすべきは１区画を大規模化して伸びていく大きな経営がスマート農業と輸出でバラ色だみたいな議論しかしない訳ですよね」

水島「うん」

鈴木（宜）「でも、例えば日本で１５ヘクタールを超える経営って１．７％しかないです」

水島「うん」

鈴木（宜）「面積でも２７％です。そういう人達だけを支えれば何とかなるという議論でしたら、日本の農村で頑張って棚田のような斜面の農地が多い所で一生懸命、田んぼを守って国民に米を供給している人達の殆どが、もう本当にやめてしまう訳ですよね。そのようなことをやったら、この日本の大事な共同体、コミュニティも維持できないし、米の生産量も、国民に充分、供給できない訳ですよね」

水島「うん」

鈴木（宜）「それなのに、そのような机上の空論、まだ一部の人達だけが儲かればいいようなところに、所得補償の議論も矮小化してしまう様な流れが出て来ている訳ですよね」

水島「そうですねぇ」

鈴木（宜）「ですからスピード感も無ければ、対象も全く限定されてしまったら、もう、これで、あと何年もつか判らないって言っている現場を見ているのかと。だから、そういう人達を今、頑張ってやって行けるような見通しを今、示さなければ間に合わないのに、そういうものが放置されているんですよね。そこが本当に危機だと思います」

水島「そうですね。はい。本当に今、問題点を全部、あげて戴いたと思うんですけども、現実的な問題として、そこのことを、まぁ、はっきり言うと鈴木さんのおっしゃっている通り、石破さんは自分が政権に居ない時は結構、それなりに日米の安保の交渉といった日米合同委員会の問題も見直すとか、中々良さげなことを色々言っているんだけど、いざとなったら何もやらない。嘘ばかりついているっていうね。

２０２７年っていうことは、お前、そこまでやっているつもりなのかというね。図々しいというか、こういうような状態で、嘘だけでやって来たっていう印象があるので、まぁ、正直言って、あまり期待できないところがあるんですけど、問題点は今、全部、挙げて戴いたと思います。だから未だ、やる手はあるという事だと思います。

それと鈴木（宜）さんに素朴な疑問に答えて戴きたいんですけど、減反を何十年もずっと続けて来たじゃないですか。それで、どんどん、こういうようになって、物を作らなければお金をあげるみたいな形でやってきたんだけど、農家に戸別補償と言うか、現状の農家ということに限って言えば、財政の問題から言うと、どのぐらいの政府の援助が必要だと思いますか」

鈴木（宜）「そうですねぇ」

水島「うん」

鈴木（宜）「まぁ、５千億円。５千億円少々の額で、ある程度のことは出来ると思いますのは、今、これだけ国内の米が足りていないって言っているのに、それをほったらかして輸出を８倍に伸ばすという目標だけを掲げている訳じゃないですか」

水島「そうですよ」

鈴木（宜）「輸出の方には、６０キロで５千円相当の補助金を出しているんですよ」

水島「うん」

鈴木（宜）「だったら、それを輸出じゃなくて、今、苦しんでいる国内の主食米を増やす為に６０キロ５千円という風な直接支払いを振り向けるとすれば、米価が下がって６０キロ１万５千円になれば、小売で５キロ２５００円ぐらいですので、消費者は助かると。それに５千円を足す訳ですから、農家にとっては２万円になりますので、農家も何とかギリギリやっていける水準になる訳ですよね。

ですので、イメージとしては、そのぐらいの６０キロ５千円、１０アールあたりで４万円ですね。このぐらいを出せればいいと考えますと、生産量７００万トン弱に、それをかければ大体、５千億円台で出来るんですよね」

水島「いやぁ～…」

鈴木（宜）「ですから、それは、そんなに極端な多い額でも何でもない訳ですよね」

水島「いやいや、全くそうですよ」

鈴木（宜）「なのに財務省、財政当局からすれば、そんな金が何処にあるみたいな議論になってしまって、今、そういう物凄い圧力を、皆さん、背中から受けているので、こういう議論を口に出来ないようなね、正に、そういう中で、何も発言できないような状況になってしまっているというきらいがありますよね」

水島「はい。いやいや、有難うございます。つまり５千億円ですか」

鈴木（宜）「はい」

水島「ちょっと待って下さいと。もうウクライナに３兆円も出しているんですよね。何の関係もない国の公務員の給料だとか、ウクライナの人達の年金だとか、実際には、もっと軍事的な援助をやっているんですけども、それも５割、何処かへ消えちゃっているっていうね、こんなことをやって３兆円ですよ」

鈴木（宜）「（頷く）」

水島「３兆円をポイポイ、ポイポイ使っている訳ですよ。もっと言えば今度、あのＩＲの為にインフラ整備だって言って、大阪では１３兆を使うって言うんですよ。今、やっている万博だって全然、定員にもいっていないけど、成功だ、成功だっていうキャンペーンをやっていますけども、現実には２千数百億円でやるって言っていたのが、もう１兆１千億、２千億円迄いっている。会社だったら社長は、みんなクビですよ（失笑）

こういう事をやって、だって、そんな為にね、５千億円なんて、まぁ、５千億円って大きなお金ですけど、鈴木（宜）さんがそのぐらいで出来るって、ちょっと、そんなことぐらいやれよと、消費税で今、１９兆とか２０兆とか税収が上がっているみたいですけどね。やれることは、いくらでもありますよと。

まず、ウクライナの３兆円をやめたらってね。今、トランプは、もう自分のＸで金を返せ、金を返せ、ウクライナ、金を返せ、ＵＳＡＩＤとかもね、もう凄いですよ。つい昨日ですか、う～ん、笑っちゃうぐらいですよ。こういう問題で具体的にやり始めています。こういうことで、皆さんから一言ずつ貰ってから鈴木（宜）さんにコメントを戴いて、この問題を終えたいと思うんですけど、これは安全保障の問題で考えると、食糧安全保障って、めちゃくちゃ大事じゃないですか」

用田「私は米の細部についてまで話す事は出来ませんけども、一つはロシアが頑張っているダーチャですよね」

水島「あぁ、そうですね、はい」

用田「所謂、家庭菜園。お爺ちゃん、お婆ちゃんがそこに住んで別荘みたいなものですけど、しかし、それで自給自足をやろうと。それは苦しい時代を経過して来たからですね」

水島「うん」

用田「それをやろうということがあるんですけども、日本は、それが全く無いですね」

水島「そうですね」

用田「それから、私は大したコメントが出来ませんけども、私の親戚は熊本で農家をやっているんですよ。しょっちゅう行くんですけれども、山鹿でスイカをやっていて、スイカが重たいもんですから、歳をとったから梨に替えようと言って、素晴らしい梨を作っているんですよ」

水島「はい」

用田「ところが、そのお父さん、お母さんが、もう９０代になって、そして継いでいるのが息子さんですけども、私は恥ずかしながら７３になりましたけども、彼は７２です」

水島「うん」

用田「だから、今、先生がおっしゃられたのは、あと５年ですが、ずぅっと行き来している私の実感だと、５年はもたない訳ですね。もう今です。倒れてしまう」

水島「あぁ」

用田「今です。だから、今、先生がおっしゃった通り５千億円という金が当座の必要な金であれば、それは直ぐにやるべきですよね」

水島「うん」

用田「直ぐの施策であるべきだと」

水島「ほんと、やれますよね」

用田「財務省は都合の悪い時には、お金が無いと言う訳ですよ。だから、お金がないんじゃなくて、お金は基本的に５千億円だったら、いかようにもなるので」

水島「なりますね」

用田「それは基本的にやれよというのが、いや、国が亡びるかもしれない、危ないかもしれないという話をしているのに、何だろうと思います」

水島「はい」

用田「それで７７歳になる前、まぁ、６０歳ぐらいの時から、ずっと、もう、あとが無いよねという話をしている中で、だから、そういう人達は職人ですよね」

水島「うん」

用田「やっぱり、この国は職人の国ですよね。だから、そういう職人の人達をグループじゃないけども、その指導グループとか組織かよく分からないけども、そういうグループの中に入れて、若い人達の弟子でありませんけども、何か農業をやりたいっていう人達に、そういう５年とか１０年サイクルで教え込むという、やっぱり宝を使う必要があると。それが無くなってしまったら終わりですよね」

水島「いや、全くそうですね」

用田「私も詳しくは分からないけど、多分、剪定とかそういうやつをやると、ここを切って、ここを切ってなんていうのは素人では絶対に分からないですよね」

水島「うん」

用田「いずれにしても、そこに魅力のある形で、例えば農業をやると１千万円の所得補償をしますとか、或いは農機具を買うのにＪＡは役に立ってはいるけれども、農機具は高い訳ですよね」

水島「うん」

用田「それに対する補助もしてあげますと言ったら、５千億円が１兆円でも構わないと思うんですよ。まず、そのスタートラインのお金を使って直ぐに活性化して…」

水島「そこから希望が生まれますよね」

用田「はい。希望が生まれるし、やる気も生まれるし」

水島「やる気も生まれますよね」

用田「やる気のある人も出て来るでしょうし」

水島「そうですよ。若い人達も参入できるようになる」

用田「だから、そういう形をやるのは、先生が今、おっしゃった通り５年も６年、１０年も検討している場合じゃなくて、今、直ぐお金を出すという形でやらなきゃいけないだろうという風に思います」

水島「はい。なるほどね。鈴木（傾）さんは、どうですか」

鈴木（傾）「はい。食糧問題で思い出すのがコオロギですよね」

水島「あぁ、コオロギ、ありましたね」

鈴木（傾）「えぇ、ありましたよねぇ。コオロギを食べようっていう話になった時に何故、コオロギなんだと。コオロギだけじゃなくて昆虫食をどんどん進めて行きたいっていう流れで、そういうのが２～３年前にありましたよね。あの時から、もう既に日本の食糧問題というのは米を潰す、日本の食文化を潰す為に最初から、そういう風に…」

水島「何か、そういう感じがしますよね」

鈴木（傾）「仕組んでやっているんじゃないかって、そういう気になっちゃいますよねぇ」

水島「はい。そういう感じですねぇ」

鈴木（傾）「はい。結局、それで米も足りなくなって値段も高くなって、じゃあ、どうするという話も出て来た時に、日本の食文化の米を作るっていうのは限界に来ているんだから、外国から買えばいいじゃないかっていう話に最初からもっていくつもりで…」

水島「そうですよ」

鈴木（傾）「やっていたんじゃないかという風に感じるんですよ」

水島「いや、全くそうですね」

鈴木（傾）「それで米だけじゃなくって、それこそ日本のおかずになる魚もそうですし肉もそうですけども、そういうのを全部、外国から持ってこないと、もう食糧が無いと」

水島「うん」

鈴木（傾）「最初からそういう風にもっていくつもりで、日本を金づるみたいにして、もし、日本が何らかの敵対行為をしたら、食糧を切られて日本が終わるっていう状況に、知らず知らずの内にやって…」

水島「しっかり首根っこを押さえちゃうっていうねぇ」

鈴木（傾）「はい。そういう感じで進んでいるんじゃないか。今回の米の問題も、その一環じゃないかなぁという風に思いますねぇ」

水島「そうですねぇ。平成維新の会を創った、あの人、何て言う、あの有名な平成維新の会の人でね」

鈴木（傾）「えぇ」

水島「あぁ、何だっけ、あの人。あの人が言っていたのは、維新と別になった人ですけど、あの人がオーストラリアとアメリカのカリフォルニアに水田を作ったらどうだと。そこに土地を借りて日本の農民と資材とかだけ送ってね、安くて美味い米を作って輸入させりゃあいいだろうと。この脳天気な感じがね」

鈴木（傾）「えぇ」

水島「本当に生産工場としてしか田んぼを見ていないっていうかね、その地域社会とか共同体とか無いんですよね」

鈴木（傾）「結局、お金しか見ていないんですよね」

水島「いや、そうですよ」

鈴木（傾）「お金を出したら買えるだろうと。じゃあ、日本で作る必要が無いだろうっていう発想だと思うんですね」

水島「はい、そういうことですね。杉山さんは、この問題、どうですか」

杉山「私は、この件に、あまり詳しくないんですけど、でも、政府がずぅっとやってきた政策っていうのは、どんどん歪みを生んで来た訳ですよね。まぁ、減反、減反って言っ

て、それで足りなくなりましたって、まぁ、立て直す為には根本から変えなきゃいけなくて、先生がおっしゃるように所得補償もそうだろうけども、減反っていうのもやめなきゃいけないと。直ぐには、やっぱり変えられなくて、少しは時間がかかりますよね。

何か似たような事をエネルギーの方で、私はエネルギー屋ですけど、まぁ、やっていてね、火力発電所は要らないって言って、今、どんどん無くしている。ＣＯ２が出るからとか言っているんですけど、何か今日、もうちょっとで電力逼迫とか何とか言って（失笑）」

水島「そうなんです」

杉山「何を余計なことをやっているんだろうと。何故、国民が本当に必要なものをきちんと供給する体制っていうのは作れないのか。そんなに難しい話では無いと思うんですけどね、まぁ、困ったもんだと思います」

水島「はい。おっしゃる通りですね。どうして、こういう発想が、そのまま出ちゃうんだろうっていうね、エネルギー、いや、それと前にもお話し戴いたけど原子力発電所だってね、職員が学ぶ為には二日、三日でやって出来るもんじゃないでしょう。やっぱり何年もやってみて、職人っていうか職員というか技術者が生まれる訳でしょう。

農業も丁度、今日、番組で紹介した無農薬メロンをやっていた人が居て、池袋の出身の人が岡山の方へ行って作っているんですよ。それで高島屋なんかで１万５千円で売れるようになった。１４年もかかっているって言うんですよ。やっと生産が出来るようになったのが４年間、貧乏で苦労しながら…、やっぱり技術はそういう蓄積が無いと出来ないって言うでしょう。だから、こういうことを、ちょっと、今、メロンを持って来てって言ったんだけど、これ、どうですか、砂漠の中東とかね、向こうは農業なんかも色々やり始めているじゃないですか」

石田「そうですね」

水島「うん」

石田「まず、凄い、僕、喋ろうと思ったことを、水島さん、今、聞いて戴いたんで…」

水島「あぁ、そうなの、ごめんね。はい、どうぞ」

石田「いやいや凄く良い振り方ですけど、サウジアラビアと日本って、どっちの方が食糧自給率が高いと思いますか」

水島「え？」

石田「日本とサウジ」

水島「一応、日本って言いたくなるけどね」

石田「言いたくなるでしょう」

水島「うん」

石田「サウジの方が高いんですよ」

水島「あぁ、そうなの」

石田「これ、品目にもよるんですけど、概ね、サウジアラビアの方が食糧自給率が高くて、正に水島社長のおっしゃった通り、サウジアラビアは石油の国ですけど、でも、実は水の生産量は世界一ですね」

水島「ほぉ～…」

石田「真水の生産量」

水島「うん」

石田「元々水が無い砂漠だから農業なんか出来なかったんだけど、水が無いっていうことで彼ら危機感を持っていたから、沿岸部に淡水化プラントを造って海水を汲み上げて真水を作っているんですよ」

水島「うんうん」

石田「これが、もう十数年前からペルシャ湾と紅海の両方の沿岸に沢山、淡水化プラントを造って水を造っているんですけど、その真水がつくれるようになったもんだから、今度、灌漑農業が出来るようになって、食糧自給率を高めていく政策を、ずぅっと十数年やっているんですね」

水島「うん」

石田「僕も前の王様のアブドラ国王の時にサウジアラビアに行き始めたんですけど、その時から既にサウジアラビアのホテルって言ったら、野菜のサラダバーなんかは、もう日本と同じぐらい、ずらぁ～っと新鮮な野菜が並んでいて…」

水島「ほぉ～」

石田「これは全部、サウジアラビア産ですよぉっていうことを言っていて…」

水島「ちょっと信じられないよね、それね（笑）」

石田「信じられないでしょ」

水島「凄いね（笑）」

石田「日本の食糧自給率、カロリーベースで３８％ですって」

水島「うん」

石田「それに対してサウジアラビアは、さっき言ったように品目にもよるので全体の平均が出し難いんですけど、まず乳製品は１１２％」

水島「う～ん…」

石田「もう完全自給ですね。肉類は６０％。青果物、野菜、果物は５２％。サウジアラビアの穀物は自給率が低くて８％ですけど、でも、それ以外、概ね、食糧自給率は、年々上がっているんですね。意図的に上げているっていう政策をサウジアラビアはやっているんですよ」

水島「うん」

石田「さっき言った淡水化プラント」

水島「うん」

石田「これが真水をつくって灌漑農業が出来るようになって、サウジアラビア国内で色んな野菜とか流通されるようになったんですが、あっ、何ですか、そのメロン。それはサウジアラビアのメロンですか」

水島「あぁ、これが今、ちょっと、ご紹介すると、これが無農薬。完全に無農薬」

石田「ほぉ〜」

水島「これ、高島屋で１万数千円で売っているメロンですよ」

石田「うん」

水島「貴重品ですけど、物凄く味が良くて、夕張のメロンとかとは、また違ったね」

石田「はいはい」

水島「梨に近い爽やかな甘味と」

石田「えぇ」

水島「うん、まぁ、これを、また明日の番組で紹介するつもりでね」

石田「あぁ、今日、ここで食べられる訳じゃないんですね。あぁ…」

一同「(笑)」

水島「ちょっと残念ですけど。申し訳ない。これが本当に最高に美味しいらしいです」

石田「えぇ。美味しそうですね」

水島「というのが今、言った、そっちにね…」

石田「はいはい」

水島「みんな、やっぱり努力して作っているんですよね」

石田「そうです、そうです。サウジの場合、石油も天然ガスもあって、食糧自給率も更に高めて、石油が世界一であると同時に真水の生産量も世界一ですよ」

水島「それ、凄いよねぇ」

石田「そういうことを意識的にずっとやって来ている訳ですよ。でも、先程、鈴木宜弘先生のおっしゃる通り、日本の政府は、もう、そういう自給化という方向とは真逆の方向にどんどん向かっている訳じゃないですか」

水島「そうだよね」

石田「真逆の方向に向かって、来年あたり食糧危機じゃないの。それでイランとイスラエルの戦争も始まっちゃったから、ひょっとしてエネルギー危機もね」

水島「うん」

石田「何か起きるかもしれないし、ガソリン代がいくらになるか分かんないって状況の中で、それでも食糧とエネルギーの海外依存度をどんどん高めている訳ですよ。もう一個ね、やっぱり僕が何か凄く気味悪いなって思うのが、この政府も勿論、もう最悪の政策をやっている訳だけど、それを、よいしょ、よいしょって持ち上げているマスコミ報道」

水島「そうだよねぇ」

石田「マスコミは今、小泉進次郎フィーバーじゃないですか」

水島「これは、まぁ、つくられたものだよねぇ」

石田「そう。だから、本当にマスコミのマインドコントロールって先程、鈴木先生がおっしゃっていましたけど、例えば備蓄米の件で言うと、我々、ネット民というか、YouTubeとかＸを見ている人は、この備蓄米が実際は５キロ８３円なのに、実際、それが２千円で売られていると」

水島「うん」

石田「元々税金で買った備蓄米に、高値を吹っかけて国民が高値で掴まされている。しかもテレビ報道を観ていると、その備蓄米は一部のスーパーマーケットで販売されて、前の日から、どうやら行列をつくって並んでね」

水島「うん、うん」

石田「備蓄米を買いに行っている人達が居て、最初に備蓄米をゲット出来た人が高らかに備蓄米を上げて、ゲット出来ましたぁ～とかと言っている、そういう映像があってね」

水島「そうだよね」

石田「そのワイドショー映像には、こっちの右側のテロップの方に備蓄米大ブームとか書かれている訳ですよ。更に、この間、見たのがテレ朝の報道でしたけど、実際に備蓄米を炊飯器で炊いて食べているお宅にテレビ局がお邪魔しているんですよ」

水島「うんうん」

石田「彼らにインタビューして、どうですかぁと聞いて。備蓄米は美味しいですねと」

一同「(笑)」

水島「(笑)」

石田「普通のお米と、そんなに変わらないですよっていうことを何か報道で流している。或いは別の備蓄米を食べた人が、普通のお米よりも値段が安く手に入れられるから、凄く有難いです、有難うございますみたいな。日本の政府にお礼を言っているような報道とかが流れているんです」

水島「うん。そうだよね」

石田「その結果、小泉進次郎が米の値段を下げてくれたんだ的な」

水島「そうそう、そう」

石田「そんなキャンペーンになっちゃっているじゃないですか。でも実際、下げたんじゃなくて、８３円の米が２千円の高値を掴まされちゃっているのに…」

水島「恩着せがましく言われる筋合いじゃないよねぇ」

石田「ねぇ」

水島「うん」

石田「テレビ局は、その辺に１ミリも触れないんですよ」

水島「うん」

石田「備蓄米の本当の味、味覚は人それぞれありますよ。美味しいっていう人は美味しいと言うかもしれない。でも農家さんに対して失礼でしょっていうね。新米で凄く美味しい新米があって、それと比較して大して変わらないって農家さんに失礼でしょといった意見も一方でいっぱいあるのに、テレビ局は、そういうことを全然、報道しないですよ」

水島「うん」

石田「だから正に、さっき鈴木さんがおっしゃったような、もう意図的なキャンペーンって言うかね」

水島「うん」

石田「日本の政府、財務省とか。そこを更にマスコミが広告塔になって、日本の食糧問題を今、政府、小泉進次郎が解決しているんですよぉと」

水島「うん」

石田「だから、どんどん、みんなで小泉進次郎を盛り上げていきましょう的なね、そんな空気感になっているのが本当に気持ち悪くて」

水島「気持ち悪いねぇ、う～ん」

石田「だからテレビしか観ていない方は、コロッと騙されちゃう訳ですよ」

水島「うん」

用田「テレビが、おっしゃる通り空気の支配ですよ」

石田「あぁ～」

水島「そういう空気だよね」

用田「だから、そういう空気を作るから」

石田「空気を作る。世論を形成するってね」

用田「みんな、そういうものを生温くいっちゃう訳ですよ」

石田「そう」

用田「それで、あとの話にもあるんですけども、正に今、日本が置かれている状態は、今だけ、金だけ、自分だけじゃないですか」

石田「うん」

用田「最近、あまりテレビを観られないと思うけども、テレビで宣伝に出て来る転職」

石田「転職ね」

用田「転職の事が沢山、出て来るんですよ。リクルートだとか何かですね」

石田「今ねぇ、人材派遣会社が儲かるんですって」

用田「だから、それが、この日本を浮かして浮き草にして、ものを考えない、これは陰謀論だと言われるかもしれないけども」

石田「でも、実際、思考停止にさせられているんですよ」

用田「させられている。だから、先程、一つ農業も多分、関係者の中には当然、知っている人間も居る訳です。こういう状況にあるっていうことは、いずれ崖から落ちるっていうのは解っているんだと思いますね」

石田「うん」

用田「だから１０年、２０年前から、はっきり言わせて貰えば、これは仕掛けられたもんだと」

石田「そうですよ」

用田「無策じゃない」

石田「うん」

用田「これは仕掛けた問題で、基本的に、それが、所謂、国境を破壊して国を破壊して、人格を破壊する、そして何かの下につけてしまうという流れの中で、ドゥーギンが、そういう話をしていましたよね」

石田「うん」

水島「そうです」

用田「あらゆる階層の中に、細胞じゃないけども、その血が巡っていると」

石田「うん」

用田「所謂、官僚組織の中に」

水島「うん」

用田「その中で、農業の話が今、色々出て来て、もう、いくところまで来たなという感じはするんだけども、それ以外の所でも、いっぱいあるじゃないですか。この国の官僚って一体、誰の事を考えて仕事をやっているんだろうなと」

水島「だから財務省の解体運動っていうのが国民の中にあるじゃないですか。でも、その

中で一番、大事なのは、財務省の役人が卑怯者で頭の悪い奴じゃない。つまり、全部、繋がっているっていうね」

用田「はい」

水島「ＦＲＢにも繋がっているしね、そういう意味で、今迄の世界を支配していた人とも繋がっているっていうね」

用田「だから厚生労働省も単独じゃなくてね」

水島「そうです」

用田「全部、同じような思想でやられている」

水島「お注射もね、みんな、そうですよ」

用田「だから米が無くなると自民党が言った時、最初に進次郎が替わるか替わらんかの時だと思うんだけども、幹事長が打ち出したのは、所謂、増産っていう話はしました、口では当然、そこに問題がある訳だから。それから大規模農業っていうことです」

水島「そう。そこです、今、さっき言ったの」

用田「それから並列的に輸出って言うんですよ」

水島「うん」

用田「順番が違ってなくないって」

水島「全然、違う」

用田「何故、並んで輸出なのと」

石田「輸出するだけの米は無いですから」

用田「そう、だから国産の米が余ったら輸出に向かうだとか、或いは、備蓄米にするのに外国米を使いましょうっていう話なら解るけども、今、何も知らないような状況の中で、少しずつ穴をあけて輸出米が多くなっているでしょ」

石田「そうそう。うん、これで輸出するっていう余裕は無いはずですもん」

用田「これを策略と言っても、あまり言いたくないけども、やっぱり…」

水島「一番、解り易いのは…」

用田「やっぱり考えた奴が居るんだと思うんだけど」

水島「昔、植民地経済でね、フィリピンはバナナ、マレーシアはゴムとかね、つまり他の業務をさせないで、だから、今回、我々の場合は今、もしかしたら、大変、旨くて高い米。外国人用に、こういうものを作らされて、あとは小麦粉や何だって他の物を食わされようとしている」

用田「うん」

石田「だから昔のプランテーションですよね」

水島「プランテーション。そういうことですよ」

石田「それも地元民が安い賃金で働かされて、俺達は、それを食べられなくて」

水島「そう（苦笑）」

石田「外国人が、どんどん高値で外に売って行く為の利益を…」

用田「今、そうなっていますよね」

石田「なっています。なっています」

用田「日本酒も外国に出たり…」

石田「いやぁ、そうそう、そうそう」

水島「はい。まぁ、そういうことになっているんでね。この間の報告だとカリフォルニアに日本の銘柄米といったら、日本の銘柄米の値段よりもカリフォルニアの方が安かったっていうか、まぁ、典型的に表れているんだけども。実は稲垣さん、うちの場合、くにもり農園っていうのを大阪の北の方で造り始めていますけど、この問題についてどうですか」

稲垣「はい、今、国守衆関西の仲間と大阪の高山というところで農園をやっています。先程のお話を受けてのことになりますけど、戦後の占領政策として、やはりヘンリー・キッシンジャーが『食糧供給を支配する者が人民を支配する』ということを言ったということが言われている様に、やはり日本人に対して『米を食べると馬鹿になる』という宣伝までして…」

水島「あぁ、覚えています」

稲垣「そして食文化を変えられてきたと。その後、流れの中で、今のこういった政策が、続行してやられてきた。そして日本の米作りが、いよいよ最終段階まで破壊されようとしているのが現在の状況だと思います。いつから危機感を持って農業をやらなきゃと思ったかと言うと、やはり種子法の廃止、種苗法の廃止辺りから、あぁ、これは、いよいよ日本の農業が潰されると思うようになって、それで４年ぐらい前から農業をやろう、農業をやろうっていうことを国守衆の中で言っていたんですけども、去年の１月、２月ぐらいから、ようやく農業に取り組み始めて、食糧難というか危機は未だ、もうちょっと先だろうと思っていたら、去年の夏には米の問題が起きて、そして今年に入ると、１月に食糧供給困難事態対策法という法律が４月１日から施行されることになって、この内容を見て愕然としました。

その内容が三段階に分かれていて、簡単に言うと、食糧難が起きたら政府が作物と資材を指定し、農家にそれに基づいた計画を提出させると。それに従わない農家は２０万円以下の罰金だと。

そして二つ目として、輸入作物の関税を減免すると。要するに格安の輸入作物が入って来て農家が大打撃を受けるということですね」

水島「うん」

稲垣「三番目、これが一番、ショックですけど、最悪の場合、それでも対処できない場合は配給制を布くと。要するに、今の政府が日本国民の生殺与奪の権を握るということにな

ると思いますけども、それを聞いて、あぁ、これは、先程、鈴木先生がこのまま放っておいたら日本の農家は、あと５年で壊滅的になるというお話をされていましたけど、やっぱり、その他の問題とか考えていくと、本当に近々有事になるだろうということを考えると、５年より、もっと早いんじゃないかという危機感があって、今、若い人達で農家をやりたい人が多いっていう話ですけど、やはり中々食べていけないということで、政策そのものを転換しないといけないんですけど、それでも直ぐ転換することは中々出来ないということで、私達は、もう政府はあてにならないから自分達で自分達の命を守って、自給自足の体制をつくる為に自分達で農業をやらないと駄目だということで、今、高山という所で一生懸命、取り組んでいるんですね。

やっぱり国民のそれぞれが、自分の出来る範囲で週末だけでも自分の家族を養えるだけでもやっていくっていう国民運動をしていくことが非常に大事じゃないかなぁと、今、感じています」

水島「そうだねぇ」

稲垣「一つ、加えるならウクライナの問題が今、日本人も、ずっと注目していますけど、ウクライナの戦争とか歴史とかで学ぶというのは、一つは核兵器を持っていないと、あぁなるぞいうことが目の前の教訓ですし、ウクライナは旧ソ連時代のスターリンの時に穀物を輸出に回すという、５か年計画の一環でしょうけども、外貨を稼ぐ為に、それをやったところ、自分達の食べる食べ物が無くなって大飢饉になったと。

当時、日本人がウクライナを旅行していて、飢えて死んだ家族を、その家族が食べるというような写真を残していたりするぐらい悲惨なことになったことが、記録として残っていると。

スターリンはグルジア人でしたけど、基本的にユダヤ勢力が乗っ取った国がソ連ですから、結局、今、国際金融資本ですね。穀物メジャーとか。そういったものが、かつてウクライナにやったことと同じ問題に今、日本が直面していて、戦争でもそうですけど、今の日本は本当に次のウクライナになるという本当に厳しい状況なので、この食糧問題は本当に早急に取り組まなければいけない問題だと思って今、農業問題に取り組んでいます」

水島「はい」

稲垣「以上です」

水島「うん。そういう意味で、我々が呼びかけて、今、そこの京都と大阪の所にある棚田を全部、借りまして、そこで去年、収穫があって中々美味しい米が出来たんですよ。で、やっぱり向こうの地域の農家の方にご協力と指導を戴いているんだけど、子供達も参加してね、それから今、我々の仲間、このテレビを観ている人達は、自分のマンションとか、そういうところでプランターをつくって、どうやったら野菜や米が出来るか。

一つ小さなプランターで米づくりだけでもノウハウを知っておく。庭がある人は庭でやるということをやって、本当に自分達で守っていかないと駄目だろうという感じがするのと、今、言ったように、私は、もう一回、その農業政策で、もっと、ちゃんとやるならＧＨＱが本当に地主から小作農達に土地を解放したと。あれは本当に良かったのかと。

小規模農家を沢山、つくって個別に撃破されていく。これは、やっぱり、大きな食糧政策じゃないか、戦略的な政策だったんじゃないかと。日本の農村共同体ですよね。こういう

ものを完全に壊しちゃった。その残滓である農協すらも、ぶち壊して株式会社にしようとしている。これを物凄く徹底的にやっているんでね。そこを、ちょっと対処しないと本当に駄目だろうと。それから我々国民自体が本当に一つ一つ野菜のつくり方とか米のつくり方とか、そのぐらいは自分のベランダがあったり小さい庭でもあれば、そういうことをやってノウハウを知っておかなきゃいけないっていう時代が、本当に残念ですが来たということですね。石田さん、どうぞ」

石田「本当におっしゃる通りで、もう本当に食糧を作れるのって田舎じゃないですか」

水島「はい」

石田「地方ですよ」

水島「はい」

石田「今の政権は食糧を潰す政策に加えて、今度、地方を潰す政策をやっています」

水島「はい、そうです」

石田「コンパクト・シティだのスマート・シティだの言ってね」

水島「うん」

石田「こうやって、都市部に人を集めて、地方はどんどん潰していくみたいなことをやっちゃっている訳ですよ。でも実際に食糧をつくっているのは田舎なので、戦争とか何か自然災害とかで物流が遮断されたなんて言ったら、多分、東京とか大阪は本当に食糧危機に陥るんじゃないかと言うぐらい、今、結構、直前に来ている状態だなと思っています」

水島「そうですね」

石田「鈴木宜弘先生と同じようなこと、そのエネルギーとか食糧とか正に国防であるみたいなことを、エルドリッヂ先生が、ずっとおっしゃっていて、先日、エルドリッヂ先生にお誘い戴いて、高知県の仁淀川へ行って来たんですよ」

水島「ほぉ」

石田「エルドリッヂ先生は仁淀川に移住する準備をしていると」

水島「あぁ、そう。へぇ〜」

石田「何故と言うと勿論、仁淀川が凄くきれいな町で美しくて、町自体に、そもそも愛情が込められているっていうのがあるんだけど、それ以上に水と食料ですよ。で、その仁淀川町の美味しくてきれいなお水と豊富に採れる食物があって、いざ、何が起きても、ここだったら生き残っていけるっていう確信を持って、今、仁淀川町に移住する準備をされているらしいですね」

水島「なるほどねぇ。中々素敵だねぇ」

石田「素敵でしょ」

水島「う〜ん」

石田「今、家族全体でね、あそこで自分達が生計を立てられるように、今、息子さん、娘さんと奥様と、みんなで準備をしています」

水島「へぇ～」

石田「そこに遊びに来ないかって言われて、エルドリッヂ先生の娘さんがやっている民泊とかへ行ったんですけど、本当に素晴らしい所です」

水島「なるほど」

石田「そう考えると、東京の人達とか大阪、名古屋とか都市部の人達、最終的に食糧危機のとばっちりを一番、受けるんじゃないかなと思っていて、東京は食糧自給率がゼロパーセントですってね」

水島「うんうん」

石田「厳密に言うと０．００何パーセントとか一応、あるんですけど、練馬大根とか作っている所もあるので、でも、実質は、ほぼほぼゼロパーセントですよ。それでいて人口は、１千４００万人とかいるでしょ。これ、何か起きたら食糧は絶対に供給されないし、都市部の人達は、もっと、そういった危機感を真剣に考えた方がいいんじゃないかなぁと」

水島「いや、ほんと、その通りだね」

石田「だから、おっしゃった通り、もうプランターでも何でもいいんでね、何か目先の食べられる物を、もう２週間、３週間分でもいいから、腹いっぱいになるようなものをね、自分で作らなきゃなぁって、僕自身も最近、考えている今日この頃ですよ」

水島「いやいや、丁度、イランとイスラエルの戦争を見たら、テヘランが相当、空爆されてインフラも全部、やられているとなると、一番、出て来るのはエネルギーと多分、食糧ですよね」

石田「うん」

水島「日本の場合、台湾と同じで中国海軍やその他に周辺を封鎖されると」

石田「台湾海峡をね」

水島「海、台湾もね」

石田「はい」

水島「台湾は一か月、もたないっていうね」

石田「あぁ」

水島「でも日本も殆どエネルギーと食糧で、それに近い事が起こる」

石田「そうですね」

水島「アメリカ海軍は、そんな輸送船で運んでくれるとか飛行機で運んでくれるというような状態じゃなくなったら、日本の場合、本当にベースが、そこでやられちゃうっていうこともあると思うんですけど」

石田「うん」

水島「いかに農業が大事かっていうことですが、鈴木さん」

鈴木（宜）「はい」

水島「皆さんの意見もあって段々１時間になるので、纏めのお話を戴きたいと思います」

鈴木（宜）「はい、はい。どうも有難うございます」

水島「はい」

鈴木（宜）「今回のご議論は本当に示唆に富むもので、その通りだなと思って聞かせて戴きました。有難うございます。そして、私も『世界で最初に飢えるのは日本』っていう本を書いて衝撃だと言われましたが、じゃあ、日本で最初に飢えるのは誰かって言うと、正に東京の皆さんですよね。そのことについて本当に分かっているのかと。これで農業、農村が崩壊していくと。いやぁ、農業って大変だよね、なんて言っている人達は、それが農家の問題ではなくて、自分達の命が繋がるかどうかの問題なのだと。農業問題は本当に消費者問題、国民一人一人の命の問題だっていうことを、今こそ、みんなで認識して行動を起こさなきゃいけないなと。

本当に今のお話も聞いても確認、出来ました。それで皆さんも言われていた通り、一つは自分達の力でどうやって自分達の地域から、生きる権をしっかり守って行くかと」

水島「うん」

鈴木（宜）「私も『飢えるか植えるか運動』って言っているんですが…」

水島「なるほど（笑）」

鈴木（宜）「飢え死にしないように、みんなで植えるんだと」

一同「（笑）」

鈴木（宜）「この『飢えるか植えるか運動』を、みんなでやると。正に自分のプランターでもいいし、それからダーチャみたいに少し離れた所にも出来る。そして地域で協力して、今、給食も地元の物をという運動がありますが、こういう風に給食を一つの核にして、地域のみんなで支え合って作った物を、みんなで消費する。みんなで作って、みんなで食べる様な、こういうコミュニティ、共同体ですね」

水島「うん」

鈴木（宜）「自分達の力で、しっかり守り強化していくっていうことは、一つの大きなうねりとして、自分達でやれる大事な事ですが、それと共に、とにかく今の政策を早く変えないと間に合いませんからね」

水島「そうですね」

鈴木（宜）「是非、皆さんも言われた通り、もうストーリーが出来ていて、今度は輸出の話もありましたが、最後、もう輸入しかないんじゃないかというストーリーが出来ている訳ですよね」

水島「そうなんですよ」

鈴木（宜）「それでね、それをアメリカのトランプ関税で脅されてアメリカ側も米を出せと言って来ているから、それをやらざるを得ないよねっていうストーリーですもんね」

水島「うん」

鈴木（宜）「トランプさんは第一次政権の時にも、トランプ関税というか、２５％の自動車関税で脅されて、他の国は独立国として自分達の確固たる国家戦略や外交戦略を持っているから毅然として突っぱねたけど、日本だけは何でも出すから許してね、みたいな、そんな行動しかしないじゃないですか」

水島「そうですよ」

鈴木（宜）「要するに、盗人に追い銭交渉とか鴨葱交渉、鴨がネギ背負って調味料まで抱えて、俺を食べてくれって言いに行っているようにね」

水島「いや、全くそうですね」

鈴木（宜）「そんなことをやって、前回は牛肉と豚肉を差し出して止まったと。その時、交渉担当の大臣が記者会見で何て言ったかと言うと、自動車を守る為に未だ農業で譲る余裕があるとまで言ったんですね」

水島「ねぇ」

鈴木（宜）「だから農業が生贄を差し出すリストになっていると」

水島「はい」

鈴木（宜）「そのリストに今回、残っている正に本丸中の本丸が米ですよね」

水島「そうですよね」

鈴木（宜）「米は正に国防の最終の要であり、絶対に譲ってはいけないカードなのに、何と、今回、トランプ関税が出てきたら一目散にアメリカに飛んで行って、何から譲ったらいいですかって一生懸命、聞いて戻って来たら、米も出すから許してね、みたいな話がリークされた訳ですよね」

水島「そうです」

鈴木（宜）「交渉としても絶対に譲ってはいけないカードを最初から出すから許してなんて言ったら、もう終わっていますよね」

水島「全くそうです」

鈴木（宜）「全部、はぎ取られて自動車も知るかって言われて、お終いになっちゃうじゃないですか」

水島「そうですよ」

鈴木（宜）「だから、そこも含めて本来であれば、今回のトランプさんの登場は日本がある意味、独立国として、自分の国を守るっていうことをね、しっかり食糧も、きちんとした

国家戦略、外交戦略を打ち立てるチャンスなのに、日本は正にアメリカの言うことを聞く、アメリカにどう対応するかだけで、思考停止して独立国としての、そういう風な戦略を持たずに来てしまったので、今の様な状況が進んでしまって、本当に国民の命を守る最後の砦の米まで差し出すという、最終段階まで来てしまったというね」

水島「うん」

鈴木（宜）「これをやってしまったら、本当に日本にとって非常に大変な事態、本当に物が止まったら、東京だけじゃなくて、みんなが飢える事態に突き進もうとしていますので、何とか、この地域で、みんなで頑張って行くと共に、日本の国の流れを、みんなの力で、止める、このことをやらなければ、農水省は２兆円しかないから出来る訳がないんだとか言われて、やりたいならば、その２兆円の予算の中で、どこか削ってやってみるなら、やってみろと言われるような形で、何も出来ないみたいになっていますけども、皆さん、前からおっしゃっている様に、いざという時に国民の命を守るのが安全保障、国防だということで、しっかりと国を守る為にも予算は相当、かかっても、コストは、みんなが負担するものだっていうのが正に国防じゃないですか。そう考えたら米を守るっていうことは正に国防の１丁目１番地ですよね」

水島「うん、そうです」

鈴木（宜）「これに、お金を出さないなんていう議論はあり得ない訳ですよね」

水島「そうです」

鈴木（宜）「何故、農業だけ保護するんだとか、何故、農業だけ補助金を出すんだ、なんていう、脳天気なことを言っている人が居るけども、正に農業、米を守るっていうことが一番の国防だっていうことについて、もうちょっと、みんなで理解して貰うように、今日のような番組で、こういう議論があって出来てね、そういうことを、みんな、ちゃんと観てくれて、そういう世論を早く醸成して、今のこの危険な流れを一日でも早く止めるということにそれぞれの立場で頑張ってくれなきゃいけないなぁという風に思った次第です。皆さん、重要な議論、どうも有難うございます」

水島「はい」

石田「あ、ちょっと鈴木先生に一個、質問があります」

水島「はい」

石田「鈴木先生、宜しいですか。１個、質問」

水島「はい」

鈴木（宜）「えぇ」

石田「ちょっと馬鹿げた質問かもしれないんですけども、お許し戴ければと思います。先生がおっしゃったように、勿論、農家さんを守る、お米を守る、これは、もう勿論、最前線であり重要ですけど、いざという時の為に備えて、我々都市部に住んでいる人間が、例えばバルコニーとかベランダとかで、お米を育てるっていう方法はあるんでしょうか」

鈴木（宜）「あ、充分、出来ますよ」

石田「出来ますか」

鈴木（宜）「バケツ稲とかありますけども、もう、ちょっと広いやつでも、お米は充分に作れますので」

石田「あ、そうなんですか」

鈴木（宜）「そう。そこら中で米を作っておくっていうことも本当に重要なことですから、土地、農地が無ければ都会でも、そういう風なことをして、みんなで正に地産地消を超えて自産自消ですね」

石田「ふぅ～ん、ふんふん」

鈴木（宜）「このような部分を、しっかりと、みんなが持つということと、あとは、今回も備蓄が少な過ぎるんじゃないかっていうことが問題になっているのに、財政当局は備蓄には金がかかるから国家備蓄をやめろみたいなことさえ言い始めてですね」

水島「酷い話ですね」

鈴木（宜）「食糧自給率を上げるのに金がかかるから、もう放棄して、もっと輸入を増やせみたいな、全く話にならない議論をしていますけども、だから備蓄を色んな形で増やすのも国防の要ですから、しっかりと備蓄を増やすと共に、それぞれの家で作ってそれを自分でも備蓄できることは、備蓄しておくという、かなり備えになりますよね」

石田「あぁ、やろう」

水島「ね」

鈴木（宜）「その時は家庭での備蓄も、かなり義務付けて備えている国もスイスとか、いくつかあると思いますね。そういうことも含めて、自分のところで出来る対応を、しっかりと、国の政策としても推奨しながら進めるっていうことも大事な事かと思いますね」

石田「有難うございます」

水島「はい。鈴木さん、どうも有難うございました」

鈴木（宜）「有難うございます」

水島「鈴木さんは、これで退席になります。どうも有難うございました」

鈴木（宜）「はい」

水島「冒頭に、農業を安全保障の問題としても議論出来たのは良かったと思います。今日のタイトルは『危機の日本が直面する諸問題』ということですけれども、まず農業問題っていうのは本当に危機的な状況にある。例えば、石田さんが言っていたように自分で作るのもあるし、それから、くにもりの連中がやっているように、ちょっと離れた郊外の農家の人達と提携する」

石田「うん」

水島「例えば、集団で田植えとか何か、例えば梅とかですね、岡山で作っている南高梅ですけど、梅がバッと咲いた最盛期に一斉に採らなきゃいけないんですよ。だから、ずぅっ

と１年間、そこに居る必要はない。でも、その１週間とか５日間の最高のいい時に、一斉に、みんなで行って採るというようなことですが、それが外国人を入れる理由になっているんですよ。

だから、それは都会の人とお互いに共同でやるような作業が出来れば、昔は農村で今日は石田家、今日は水島家とか色々やっていたんだけど、それが無くなっちゃっているから、それを都会と上手く提携できれば、今、実は、それで、さっき言った稲垣さんのところでも、くにもり農園っていうのを農家さんと提携してやっているんですよ。まぁ、指導を受ける方が多いんだけども、そういう形でやると、お互いに助け合うことが出来ますよね」

石田「うん」

水島「都会と提携することが出来ると面白いということがあると思いますね。というようなことがありまして、今、本題に戻りますけど、国防安全保障、エネルギー安全保障、それから、いつも鈴木（傾）さんには言って貰っている子供格差の問題」

鈴木（傾）「はい」

水島「もう日本の国の在り方っていうのが、もう本当にバラバラ、ボロボロ、何もやってないっていうかね、そういう状態は国家としての体を成さなくなっている。さっき言ったように、植民地になりつつあるという感じがするんですけど、まず皆さんが一番、注目しているイランとイスラエルの戦いですけど、用田さん、この間、ウクライナの方はある程度、目安がついてきたと…」

用田「えぇ、えぇ」

水島「こういう事になっていますけど、未だ色々情報が錯綜していますけど、新聞でも今、これは江南タイムズですけど『精密攻撃の謎』ということで、イスラエルは何故、イランの軍首脳部・核科学者を選んで爆撃が出来たのか？と、数年計画があったということは、結局、ハマスとイスラエルの戦いの前から全部、準備していた」

用田「うん」

水島「イランを体制崩壊までもっていくのか、少なくとも核兵器の生産を止めるのかと、今、ここまで、こういうことをやって、お互いに撃ち合っているみたいな状態ですけど、それで特徴的なのは、イランが制空権を取られたと。それと、もう一つはイスラエルのアイアンドーム自体が結局、万全ではなかった。かなり破られて撃たれているっていう状況にあると思うんですけど、今の状況をどう見ていますか」

用田「多分、私より石田さんの方が詳しいんだと思いますけど」

水島「うん、中東のね」

用田「まぁ、私の知っている範囲って言うか、今、未だ途上にありますから判らない部分が沢山、ありますけども、基本的にＣＩＡとＭＩ６と、それからモサド」

水島「はい、はい」

用田「これらが、しっかりとディープステイトの真ん中に居るんだなぁというのが、よく解りました。だから結局、ウクライナでコンテナを使って無人機を飛ばすとか、色々なこ

とをしたことも、今回やったことも、イランでやったことも、基本的にほぼ一緒ですよ」

水島「そうですね」

用田「だから、ほぼ一緒のことがバレないように先にやってしまったという世界もあるという世界を聞いていますけども、しかし、いずれにせよ、世界を牛耳っているのは、正に戦争屋という実体が、世界の３つの大きな情報機関とネオコン、軍産複合体、アメリカの中に居る、上院議員も含めてですね」

水島「うん、うん」

用田「だから上下院を入れて８０％は、ネタニヤフの言う事を聞くんだという世界で」

水島「うん」

用田「これが今の我々の考え方と、非常に混乱するのが、グローバリストと反グローバリストという大きな立て付けの話だけでも、これは非常に説得するのは難しい世界があるのに、この上にユダヤ・ロビィとシオニストが凄くデカく乗っかって来て、この人達の中にＭＡＧＡの強烈な推進者が居る訳ですね」

水島「はい」

用田「だから、ここら辺のところはアメリカという国が３つ、４つに分かれる、とはいってもきれいに分かれませんけども、そういう流れの中で動いている、なかでも一番、ユダヤ・ロビィが強いということが基本的に今回、あるんだろうなと」

水島「そうですね」

用田「それから今、おっしゃられた通り、これから、いくつか沢山、教訓が出て来るのがあるんだけども、アイアンドーム、アイアンドームは基本的にイスラエルの周りからロケットとかミサイルとか飛んで来る」

水島「うん」

用田「小さなやつをバリバリっと落とすシステムだっていうことは承知していたんだけど、やっぱり弾道ミサイルとか極超音速ミサイルとか、こういうやつに対しては、完全に穴が開いているなと」

水島「そうですね」

用田「だから、それを普遍して考えると、日本の受けるミサイル・ディフェンスは一体、何なんだという世界になる訳ですね。それからアメリカの３年後にやろうとするゴールデンドームというのも、基本的に可能性は無いですよ」

水島「うん」

用田「あれだけイスラエルみたいに小さな狭いエリアも守れないのに、大きなエリアで全部を止めるっていうことは不可能ですよね」

水島「そうですね」

用田「今、ロシアの方が技術的にも上ですから」

水島「うん」

用田「そうなると、あのお金は一体、何に使うのと言ったら、やっぱり戦争屋さんが儲かるお金が、どぉ～っと入って、トランプとイーロン・マスクが喧嘩しましたけどね」

水島「うん」

用田「だけども、やっぱり軍需産業のところにお金をボンと使う、その流れ、だから、トランプには少し残念な思いがあるのは仕方がないのかなという思いはあるんですけど、やはりネオコンとか戦争屋だとか、それを支援する上下院議員だとか、ユダヤの大きな金、ロビィの下では平和な大統領、平和を求める大統領になりたいと言ったことも実現できないんだなというのが、ちょっと残念な気がしますね」

水島「そうですね」

用田「それからウクライナについても、未だ完全に確定が出ている情報の中では、ウクライナに対する支援をやめたと。でも、これは一時的なものかどうか分かりません。中東に全て支援を集中したいという話と、それからロシアとの対話を中断してしまったんですね」

水島「うん」

用田「これが二つあるのは基本的に、ある意味はロシアとウクライナは、どうぞ、勝手に戦ってくれと。そのウクライナ支援を…」

水島「でも、そのあと電話で１時間半ぐらい話していますよね」

用田「そのあとにやめますということが来ているんだと思うんですよ」

水島「うん。そうでした」

用田「そうじゃないですか」

水島「いや、言ったのがね、子供の喧嘩だからと」

用田「あぁ、そうそう、そうそう」

水島「当分、やらせるかっていうね」

用田「はい、はい。だからプーチンが電話をかけて来て、イランとのことを仲介したいと」

水島「うんうん」

用田「でも基本的にトランプからすると、もう仲介は要らんということが一つあるのかなと。だから、ここから先は石田さんに聞かなきゃ分からないですけども、トランプはＧ７をキャンセルして帰りましたね」

水島「帰りました」

用田「今、帰っていますね。それで国家安全保障会議を開くと、これは一体、何なのと言うと、一つは空母４隻が今、集まっていると。それから空中給油機も含めて二十数機ぐら

いが、ずぅっと東に向かっていると言うか、そっちに向っている訳ですね。インド洋にあるディエゴ・ガルシアっていう所にＢ２爆撃機だとかＢ５２爆撃機がそこに居て、そこは空中給油機を２回やれば、往復して爆撃ができるんですね」

水島「うん」

用田「何を言っているかと言うと、要するにネタニヤフがアメリカに対して一緒に攻撃に参加しないかと言っている部分は、バンカーバスター、また核を持つようなバンカーバスターも含めて、完全に核をつくっている施設を破壊する為には、これが要る」

水島「うん。アメリカ製のバンカーバスターじゃないと駄目だっていうね」

用田「はい」

水島「はい」

用田「それで、それを運搬するのは、もうＢ５２かＢ２しか無いって言うんですね。だからイスラエルは、それを持っていないんですね」

水島「うん」

用田「だから、私は、今回のアメリカ、トランプ大統領の決断の大きなものは、イスラエルを支援する側に回ると、はっきり言うのかですね。爆撃機も使って攻撃をするというような判断をするのかなという心配はあります」

水島「そうですね。その中で、昨日、入って来たのが、来年、退役する空母をイランの攻撃と見せかけて沈没させると」

用田「あぁ～」

水島「そういう計画があるっていうのがバラしていますね」

用田「それは何処の…」

水島「実はモサドがやるんだけども、イランがやったということで、アメリカが参戦する理由になるって言うんですね、空母攻撃で…」

用田「まぁ、空母まで沈めるっていうことは無いかもしれませんけどね」

水島「そこまでやるかどうか。そういうようなものも流れていますね」

用田「ただ、トランプの一つの見方からするならば、こういうのもあるのかなというのは、今も、あと７カ国を全部、中東の国で潰してイスラエルの覇権を確立してやると」

水島「はい」

用田「ネタニヤフは９６年から首相をやっているんですよね。だから、結局、彼もウクライナと同じで、やっていることは３０年来の悲願ですね」

水島「うん」

用田「だから、そうそうに手は引かないんだろうけども、しかしトランプの考え方としても、イランに核を持たせないっていうこともあるけども、中東で自分に代わってイスラエ

ルの覇権、これは、よく石田さんが言われるGreater Israel構想のちょっと変形バージョンも悪くないんじゃないかなと思い始めているんじゃないかなという気がしましてね」

石田「(頷く)」

水島「ちょっと、その辺ですね」

用田「そこが、ちょっと読めないところだと」

水島「石田さん、それはどうですか（笑)」

石田「うん。まず、さっき水島社長がおっしゃっていたイランへの攻撃というのは、実はイスラエル側では入念に準備された計画であって、これは今の政権が出来た時から、もう既にイランの心臓部を狙うって発表している訳ですよ。オクトパス・ドクトリンという新な軍事協議で…」

用田「それは、その時から作っている…」

石田「今の政権が始まってから発表されました」

用田「あぁ、あぁあぁ」

石田「厳密に言うと、２０２３年２月のヘルツェリア軍事会議というところで発表されたんですね。オクトパスって蛸だから、蛸の触手がハマスとかヒズボラとかフーシ派とかで、蛸の頭を狙うんだというのが軍事協議で言われたオクトパス・ドクトリンですよ。蛸の頭とはイランの心臓部だって言っていて、正に、今回、イランの主要メンバー、幹部の方々が、もう次から次へとやられてナタンズ地下核施設とかは、地下までは行っていないだろうけど、その核施設の上側の部分とか、あとサウスパルス、天然ガス田、油田とか、その辺が見事にやられちゃった訳ですよ。だから、あくまでも１０月７日のイスラエル／ハマス戦争が始まったきっかけとして報道されているあの日」

水島「うん」

石田「あれは長い目で見たオクトパス・ドクトリンの、所謂、イランの心臓部をぶっ潰すという軍事協議の、あくまでも通過地点でしかなくて」

水島「うん」

石田「そう考えたら、あの６月１２日か何かのタイミングで、イスラエルがイランに先制攻撃するっていうのは、ある意味、彼らにとっては絶好のタイミングであり、でもチャンスでもあったんだけど、そのタイミングでやらなければならなかったっていう、その鬼気迫るものもあったって、両方、あるんだけど、チャンスで言うと、例えば、ヒズボラも、もう殆ど壊滅状態、ハマスも壊滅状態で、その中で、要はイランの触手が弱体化している訳ですよ。だから、今こそ蛸の頭を潰せという、彼らイスラエルにとってのチャンスというタイミング」

水島「うん」

石田「もう一個、その切羽詰まっているっていうのは、ネタニヤフにしてみたらガザは、もう殆ど終わっているし、次の戦争を新たに仕掛けないと、引きずり降ろされて逮捕されるんですよ。だからゼレンスキーと一緒ですよ」

水島「うん」

石田「結局、本来だったら首相の座に就きたいんだけど、イスラエル国内では今、退陣要求デモが凄い事になっていますから、だから、このまま戦争を続けないと、結局、選挙が行われて退陣させられて、刑務所に入って終わりみたいな、そういう状況になるので、だから首相の座は何としてでも就いておかなきゃならない。

緊急事態宣言を継続しなきゃならないから、その為にはガザの戦争が終わって、レバノンも終わって、シリアのゴラン高原も多分、今、やっているんでしょうけど、そうしたら、じゃあ、次は、もう、そろそろイランに対して攻撃をしないと、第６次ネタニヤフ内閣は、もう終わるよねっていう危機感もあったと思うんですね。

国内で、司法制度改革っていうものに対して国民のデモも凄く激しくなっているので、要は首相の下に裁判所を置くっていう、訳の判らない司法制度改革が進んでいる訳ですよ。独裁政権に向って。それを止めなきゃなんないっていう国民、世論もあるし、そして首相の座を引きずり降ろさなきゃならないっていう国民の考え方もあるし、でも降ろされては、たまったもんじゃないから首相を続ける為、内閣を続ける為に、次の戦争をやるという、そういったタイミングも今回のイラン攻撃のタイミングだったので…」

用田「そういう風に始めてしまったら、イスラエルだって長期戦は出来ないだろうと思うね」

石田「無理です、無理です」

用田「そうすると、まぁ、２週間という話も今、出ているんだけども、逆に言うと最後の切り札は、そこで終わってしまう訳ですよね」

石田「そう。この辺りは専門家の用田先生に逆にお伺いしたいですけど、距離が離れているじゃないですか」

用田「はいはい、はいはい」

石田「ロシア／ウクライナの戦争とは状況が違いますよね」

用田「全然、違います」

石田「空中戦ですよね」

用田「それは空から全部、来ていると」

石田「空ですよね。そうしたら、もうミサイルとドローンと戦闘機…」

用田「それが無くなれば終わりです」

石田「無くなれば終わりでしょ。もう無くなると思うんですよ」

用田「枯渇していますよね」

石田「枯渇していますよね」

水島「だから、アメリカが何処までね」

石田「支援するか」

水島「というとこになるでしょうね」

石田「そうなると、今度、ロシアがどう出て来るのかっていうこと…」

水島「そういうことです」

石田「イランに対して、極超音速ミサイルだの戦闘機だのね、まぁ、プーチン政権がイランに対して支援をするのかどうか」

用田「そうなると、今度はアメリカとの戦いになりますよね」

石田「そうなりますよねぇ」

水島「いやいや、だから、今言ったようにね、今日、トランプがＧ７じゃなくてＧ８にしろと言っているのは、ロシアの事を凄く意識しているっていうね」

石田「意識していますね」

水島「それとロシア自体は今、また石油が上がり始めたし、現実的な問題として、食糧もエネルギーもある訳だから、イラン、応援するでしょうね」

石田「うん」

水島「それとねぇ、一か月ぐらい前ですか、ミアシャイマーが『イランは核武装すべきだ』というようなことを、もう必然だというようなことを言っていたっていうのを、どう解釈していいかなと、ずっと考えているんですけどね。今言ったように、この問題は、ネタニヤフがやるだけやって、そのあと、どうなるかっていうね。さっき言った２週間、少なくとも１か月以上は、お互いにもたないでしょう」

用田「基本的に戦費の問題からしても相当、金を使っているし」

水島「そうですね」

用田「だから今、空中回廊を、シリアとイラクが無力なもんですから、そこに穴をあけている訳ですよね」

水島「うん、うん」

用田「だから、今、アメリカにいらっしゃいよ、今、やって、爆撃機、飛べるよと、こう言っている訳ですよ」

水島「うん、うん」

用田「しかし、それも、やっていること自体が、ただじゃない訳ですから」

水島「そうですよね」

用田「だから、そうするとアメリカから全部、ウクライナをやめて、こっちに補給するって言うから、相当な支援があるかもしれないけれども、やっぱり、今やっているのは、どちらかと言うと、空爆とミサイルの攻撃ですから」

水島「うん。それをお金で見るとですね」

用田「まぁ、２週間から１か月ぐらいが限界と」

水島「武器商人としてウクライナも大体、やり尽くしたと。そして、今度、イスラエルに武器援助とか色々やるとしても、これ、ミサイル系ですよ。つまりイスラエルは、陸軍を上陸させる訳にいかないから。当然、ミサイルとか飛行機で爆撃とか、こういうことでしょ。それは援助するとしたらアメリカしか居ないでしょう」

用田「そうですね」

水島「もう一つ言うと、ここまで都市をやられると、イランに対して友好国だったロシア、或いは、中国や北朝鮮っていう、ある程度、武器を作れる国々。こういうのも色々とあるのと、もう一つはアラブ諸国が、これ、ちょっと石田さんに聞いてみたいのは、みんな、今のところ、沈黙している訳ですよ」

石田「うん」

水島「エジプトもサウジも色んな国が黙っている」

石田「イスラエルに対して非難はしていますね」

水島「いや、勿論、表面上はね」

石田「表面上はね」

水島「ただ具体的に言うと、今度はお金がね、じゃあ、例えば、イランに対してシーア派だけでも助けるとかね」

石田「うん」

水島「こういったイスラエルの暴虐は許さないっていう形でね、勿論、ミサイルはイスラエルに撃たないかも分からないけど、お金や色んなものを援助するんじゃないかと」

石田「うん」

水島「それと、もう一つ、これは杉山さんにも聞きたいのは、石油とかそういったものを色んな形で、アラブ諸国やそういうものを、また武器として戦略的に使うかどうか。こういうこともね、みんな、凄い連中だからね。用田さん、どうぞ（笑）」

用田「だから、今、凄まじいことが、あそこで起こっているのに、石破君、お前、本当にカナダに行っている暇があるのかと言いたいですよね。農業の話は勿論、喫緊の課題であることは間違いないけども、石油問題も今、目の前の喫緊の課題ですよ。日本に今、代替手段が全く無いじゃないですか」

石田「石油は９７％、湾岸諸国ですよ。殆どほぼ全てホルムズ海峡を通りますからね」

水島「これは、どうなんだろう。今、イランと空中戦をやっているじゃないですか。これは影響があるんですかね。ホルムズ湾が、所謂、石油のね…」

石田「それは、ですねぇ…」

鈴木（傾）「石油に関して言えば、私はずっと株式チャートを見ていますけども、取り敢えず６月９日までは沈黙ですよ。ＷＴＩの石油価格に関しては、ずっと上がっていなかった」

水島「うん」

鈴木（傾）「ところが６月９日の月曜日の時点から、まだ戦争が始まるのは１３日ですけど、月曜日の時点から、いきなり上がり出すんですよ」

水島「あぁ、じゃあ、これを予想していたんだ」

鈴木（傾）「ガンガン、ガンガン、上がり出すんですよ。ということは、恐らく６月９日から、そういうイスラエルの計画はあって…」

水島「うん、流れ始めた」

鈴木（傾）「もう金曜日ぐらいに攻撃するぞっていう、何かそういうシグナルがあったと思います。シグナルなのか、それとも要人が、その計画を洩らしたのか知らないですけど」

用田「よくあるパターンですね」

石田「まぁ、インサイダーのね」

鈴木（傾）「インサイダーだと思いますね」

用田「何かある前に価格が上がるというのはね」

鈴木（傾）「そうなんですよ。それで６月９日から石油がどんどん上がって行って、１３日に戦争が起きましたと」

水島「うん」

鈴木（傾）「その時に石油が、もう一段、ガァ～ンと上がったんですね。それで株式市場は下がったんですけど、石油企業は上がったんです。例えばエクソンとかシェブロンとかイギリスのＢＰ、昔、ブリティッシュ・ペトロリアムと言われたイギリス石油なんかは全部、上がっているんですよ」

水島「うん」

鈴木（傾）「ところが月曜日になって、石油価格が下がって…」

水島「下がった？」

鈴木（傾）「石油企業も下がっているってことを、ウォール街はどう見ているかって言うと、この戦争は長続きしないなと」

水島「あぁ、なるほどね」

鈴木（傾）「そういう風に見て、但しレイセオン・テクノロジーズというミサイル会社がありますけど、今はＲＴＸといって、そこは上がったままですね」

水島「あぁ」

鈴木（傾）「だから、まぁ、あのう…」

石田「Ｒ、レイセオンの株価ですか」

鈴木（傾）「株価が上がったままですよ。だから、その戦争屋の株は上がっているんですけど、石油は下がっているっていうことは、エネルギー的に見ると、恐らく、これは終息するんじゃないかっていうのはウォール街の見方、私の見方じゃなくてウォール街がそういう風に…」

水島「なるほど、お金の流れを見るとね」

鈴木（傾）「はい。そういう風になっている。だから石油に関して言えば今、下がっているので、国際世論とウォール街に関して言えば、恐らく戦争は長続きしないっていう見方をしていますね」

水島「杉山さんはどうですか」

杉山「よく言うのは、ホルムズ海峡の封鎖があるんじゃないかって、あのイランとアラビア半島の間に凄く細い所があって、日本の輸入は９７％が、そこを通ってやって来ていると。世界の石油の２割が毎日、そこを通っているんですね。だから、本当に封鎖したら、もう、えらいこっちゃで（苦笑）」

水島「そりゃそうですよね」

杉山「それは、もう日本は大パニックですよね。一応、備蓄は２００日分、あるっていうので、じゃあ、それを取り崩しながら他所から調達するっていう段取りをしなきゃいけない。でもねぇ、そんな簡単に買える話でも無い」

水島「アメリカから買うとか、よく話にはあるけど」

杉山「あります。それは既にグローバルなマーケットはあるんですけど、そういう緊急時に一体、本当にどれだけ調達できるか、あと備蓄を取り崩すって言うけど、それは本当に予定通りできるんですかっていう、そういう問題」

水島「うん、うん」

杉山「だけどホルムズ海峡が今のミサイルの撃ち合いで、直ぐ封鎖する動機っていうのがイラン側にあるかって言ったら無いんですよね」

水島「うん」

杉山「イランはあそこを通して、石油を輸出していて、前の中国とかインドとかが買い手になっているんですけど、それが無くなるとインドは本当にお金も無くなって干上がっちゃうので、今のところはイランもそれを止める動機は無い。それから、そこを止められると日本だけじゃなくて、中国とかも、みんな、困りますから。今、サウジから一番、石油を買っているのは日本じゃなくて中国ですからね。あと湾岸諸国も、まぁ、だから、そこで、お金を儲けている訳でね、だからイランも中国とか湾岸諸国全部を敵に回すようなことを覚悟してまでホルムズ海峡を封鎖するかって言ったら、合理的に考えたらやらないですよね。

だけど、あそこまでイランの指導者が、みんな、殺されちゃった訳ですよね。革命防衛隊

の方も幹部が、みんな、除去されちゃってね（失笑）、それから政府の方も軒並み、本当に、ずらっと、そうなると、もう一体、どういう意志決定をやって来るのかっていうのは、とにかく予想がつかなくて…」

水島「そうですよねぇ」

杉山「普通に合理的な意志決定をするんだったら、ホルムズ海峡封鎖っていうのは、まぁ、今のところ無いですけどね」

水島「一応、ニュースの断片によれば、仲介者にイランは停戦することを、一応、仲介を色々頼んでいるという、これもインチキ情報かも判らないですよ。イスラエル側のものかも判りませんけど、一応、壊滅的な打撃を受けたっていうことで、今、おっしゃったように、情報で言えば、革命防衛隊の総司令官、イラン軍参謀総長、そして核科学者６人、これは間違いなく死んでいると。それから、もう一つ大きいのは、イランの最高指導者のハメネイ師の軍事核問題上級顧問、アリシャムハニ師の死亡が確認されていると。つまり、本当に大事な革命防衛隊とハメネイ師というのは、ちょっと微妙にずれがあるっていうことがあるし、革命防衛隊の中で、所謂、ネオコンの影響があったので、トランプは前にイラクに居た上級司令官を殺したとかね、こういったことが言われているので、必ずしも一体化しているとは言えないかも分からないけれども、やっぱり、こういうメインが、ここまで殺されたら、やっぱりペルシャ人ってメンツがあるでしょう」

石田「いや、もう、その辺りは、もうメンツを潰されまくりですから」

水島「まくりですよねぇ」

石田「さっき、杉山さんがおっしゃったご意見に、僕も同意です。全く同じで、イラン側にとっては、それでもね、ホルムズ海峡を止めるっていうのは、イランにとって何もメリットが無いんですね」

水島「うんうん」

石田「ただ、やっぱ最強のカードな訳ですよ」

水島「うん」

石田「だからチラつかせは、するんですよ」

水島「うん」

石田「ハートのエースなので」

水島「うん」

石田「だからイラン政権の発表で、ホルムズ海峡を封鎖する事も一応、検討すると。そういうような発言は度々出ているんですね。イラン国会議員とか大臣とかそういう方々から」

水島「うんうん」

石田「発言が出ているんだけど、検討するってチラつかせるんだけど、ホルムズ海峡を封鎖することは可能性としては大分、低いと、僕も思うんですよ」

水島「なるほどね」

石田「ただイランがホルムズ海峡を止めなくても実質、サウスパルス天然ガス田、油田、そこをイスラエルが大規模に攻撃したので…」

水島「やりましたねぇ。はい」

石田「それで、本当にホルムズ海峡の西の方にあるカタールのちょっと上の方ですけど、カタールとイランで共同開発しているエリアは結構、広いですよね」

水島「うん」

石田「広い所は、割と全面的にぶわぁ〜ってやられちゃって、あそこの石油ガス生産が今、ストップしているんですよ」

水島「うんうん」

石田「それで原油価格が上がったというのもあったんですけど、そのホルムズ海峡の手前の部分がやられちゃった。要は紛争地になっちゃった訳なので、イランの政府がホルムズ海峡を止めなくても、各石油ガス会社のタンカーがね…」

水島「あぁ、行き難くなっている」

石田「それぞれの会社の判断で一旦、ホルムズ海峡は危険だから通らないという判断は出てくる可能性はあるんですよね」

水島「なるほどねぇ」

石田「これは政府の云々の発表じゃなくて、最終的には、もう民間企業の判断ですよ」

水島「うん」

石田「あそこの場所を通るのは、そもそも危険だから一旦、その航行を止めようと。もしも沢山の会社がそういうような判断になっていったら、実質、日本に入って来る原油量っていうのはガクンと減る訳ですし、勿論、日本だけじゃないです。だから何かのニュースで読んだのは、サウスパルス・ガス田の石油生産ストップっていうのは、あの海域全体を危機に及ぼした訳であって」

水島「なるほど」

石田「結局、日本だけじゃなくて色んな国がね、原油価格の高騰というのは、ある程度、覚悟しなきゃならないだろうっていう報道がいくつか出ていますね」

水島「でもイスラエルは石田さんが今、言った分析を、ある程度、しているはずだよね」

石田「しているでしょうね」

水島「うん、それでもやったんだよね」

石田「だから、鈴木（傾）さんがおっしゃたような、意図的に原油価格が吊り上がることを前提に６月９日から、ひょっとしたらユダヤ系の資本が原油を沢山、買っていたのかもしれないっていうね」

水島「それで儲けようっていうね」

用田「吊り上げているっていうことですよね」

石田「うん…」

水島「そういうことだね」

杉山「今のところ、それ程、上がってはいないんですね」

石田「それ程、上がっていない。７７ぐらいまで行ったかな」

杉山「１割も上がっていないので…」

水島「７５～６ですか」

石田「７５～６ぐらい？」

水島「なるほどね」

石田「一時７７ぐらいまで行って…」

鈴木（傾）「モルガン・スタンレーが言うには、もし、この戦争が長引けば１２０、１５０ドルぐらい迄、いくだろうという話ですね」

水島「そうなったら、もう…ね（苦笑）、話にならないね」

鈴木（傾）「本当にそうなるかどうかっていうのは未知数ですね」

水島「はい」

石田「結構、大方の予測が、さっきおっしゃったウォール街の予測は、この戦争は長引かないだろうと」

水島「うん」

石田「さっきお話した空中戦だから、お互いにミサイルとドローンが尽きたら、それで、一旦、もうね、何か終わりになるっていう…」

用田「私が一番、心配しているのは多分、イランは今、劣勢ですよね」

石田「うん」

用田「でも、少なくともイスラエルのミサイル防衛網を撃ち抜いたということは間違いないんですね」

水島「いや、そうなんですよ」

用田「イスラエルの国防省の建物にも当たっていますよね。当てたんですよね」

水島「そうですよねぇ」

用田「だから今回のやつで、もう一つ、やっぱり恐ろしいのは、所謂、そういう極超音速ミサイルとか、そういうやつをイスラエルは止められないとなると…」

石田「そうですね」

用田「その前の情報として、イランがイスラエルの色々な秘密情報を握ったぞっていう話がありましたね」

水島「はい。文書を全部、取ったって言いましたね」

用田「文書を」

水島「何処に配置されているとか」

用田「何処に核の施設があるかという」

水島「うん」

用田「だから、僕は、最後、本当にやるとすれば、イタチっ屁とすれば、そこを撃ち抜けば基本的にイスラエルは壊滅しますよね」

石田「あぁ、あぁあぁ」

水島「そうすると…」

用田「それは弾とすると凄くデカいですが、これはアメリカが基本的には黙ってはいないという世界があるので、ここが最後として使うのか使わないのかという気がしますけどね」

石田「イランは極超音速ミサイルは何発、持っているんですか」

用田「何発っていうのは、私はよく分かりません」

石田「永遠にある訳じゃないですよね」

用田「永遠じゃない。だから１００の単位だと思いますよ」

石田「あぁ〜、何百っていう…」

用田「全体的に３千発ぐらいだっていう風に言われていますけどね」

水島「だから用田さんが前にもおっしゃっていたように、つまり核を積んでなくても、スピードによっては相当な威力がね…」

用田「あります、あります」

水島「破壊力が凄いということが言われていますよね」

用田「はいはい。マッハ何処まで出るかにもよりますけどね」

水島「まぁねぇ、今、１０とかね」

用田「はい。だから、それの３千ある内の４種類ぐらいあったとすると、二つぐらいは、距離が短いのでイスラエルに届かないんですね。弾道弾となると、そこは届くんだけども、無人機でやったとしても基本的に途中でほぼ落とされますよね」

水島「例えばフーシ派のイエメンとかね、あの方面とか、あの辺に持ち込むと、どうなん

ですか」

用田「まぁ、持ち込むというよりもフーシが今、撃っていますからね」

水島「うん。あぁ～」

石田「だけどフーシは遠いじゃないですか、イエメンも。イエメンも結局、距離があるので…」

用田「はいはい、はい。だから、そういう機密情報を流すっていうことは多分、イランでもしないですよ」

水島「そりゃそうですね」

用田「それとイランの最後の弾は、そこを握っているのか握っていないのか」

水島「あぁ、そこらへんをね」

用田「その極秘情報というやつ、核施設も、イスラエル、あるよというやつを握っているか握っていないのかが、よく見えない部分ですけど」

石田「あぁ。あとね、イスラエルの原油輸入の４０％はロシアですよ」

用田「という風に聞きましたねぇ」

石田「そう。それでロシアとアゼルバイジャンも輸出しているという」

用田「バクー油田でしょ」

石田「バクー油田」

水島「だからロシアがカギを握っているよね。だから仲介を…」

石田「だからプーチンが結構、カギを握っていて仲介する準備あるよって言っているじゃないですか」

用田「言ったけどトランプは蹴ったじゃないですか、仲介は『いらん』と（笑）」

石田「そうですね」

用田「要らないと言ったと…」

水島「完全に、そういう評判になるから」

石田「そうですよね」

用田「トランプの自分の意志でやるぞという、だから、もう一回言いますけど、やるぞという意志は、やはり核の施設を徹底して破壊するというイスラエルの攻撃に乗るという」

石田「う～ん」

杉山「それ、アメリカがね…」

用田「はい」

杉山「本当に自分の爆撃機を使ってイランを攻撃し始めたら、イランは当然、アメリカに反撃しますよね」

用田「それという行動は、はい」

杉山「それと第５艦隊とかも狙う訳ですよね」

用田「狙いますよ」

杉山「そうしたら、もう湾岸が戦争地域になっちゃう」

用田「なります、なります」

水島「いや、なりますよ」

用田「ただ、そこが今、おっしゃった通りのエスカレートのシナリオは当然、出て来ますよね」

石田「そうなると、ロシアも出て来るはずですから」

用田「そういう意味では、ロシアは今、ウクライナで手いっぱいですからね」

石田「うん」

用田「それとロシアとアメリカが敵対すると、これは、もう超核大国同士の向き合いになりますから」

石田「そうですね」

用田「これは異次元だと思います」

石田「う～ん」

用田「それと、イランについても協定を１月に結びましたよね」

石田「うん」

用田「でも北朝鮮と違うのは、軍事支援が含まれていないという風に言われてますよね」

水島「はい」

用田「だから、そこの部分で即ロシアが加担するのかというのは厳しいと思うし、中国が加担する事はとても出来ないということでしょうね」

水島「今、そういう余裕はないでしょうね」

用田「はい」

水島「これは稲垣さんにも、ちょっと聞きたいと思うのは、少なくともイスラエルの攻撃の言い分は、イランが核兵器を持つと自分の脅威であると。だから、それを潰すと。これは許されるのか。例えば、北朝鮮は我々が核武装するとか、中国も我々が核武装すると言ったら、それは脅威になるから、東京でも何処でもやっていいってなるんですよ」

用田「だから、水島さん、私もそこが言いたかった部分があるんですけどね」

水島「うん。ちょっと、今、だからね、稲垣さんの話を…」

用田「それは日本にとっては、大変な前例をつくられたという風に思うんです」

水島「いやいや、そうですよ」

用田「上から、つくるぞと言ったって、後手であとからやる、後出しだと、こうやって、やられる可能性がある訳です。相手は中国ですから」

水島「だから、これを丁度、稲垣君とも話していたところでね、つまり、いつの間にか、ぞろぞろと自然に何かイスラエルのあれが言い分になっているけど、これ、ちょっと変だよというね。これはロシアの言い分の方が正しいんじゃないのと。一方的に、こんなことをやるっていうのは許されないっていうね、稲垣さん、これはどうですか、貴方の見解としても、うん」

稲垣「そうですね。専門的な知識がある訳ではないですけど、やはり中国も恐らく同じ立場のことを言っていると思います。例えば、国連の旧敵国条項だって、日本が、いざ、そういう構えを見せれば攻撃できるっていう立場ですし、中国自身も日本がそういう方向で来たら、もう核でという脅しをして来るのは当然のことですので、やはり、これが世界のスタンダードにされてしまうと、本当に日本は核武装の言葉も議論さえ出来なくなってしまうので、今の流れは、もう凄く由々しき流れじゃないかなぁと思います」

水島「いやいや、そうですよ。それで用田さんが今、言っていたことですね、敵国条項っていうのは外されていないし…」

用田「そうです」

水島「それと、もう一つは、北朝鮮も、いつも火の海にするとかね、まぁロシアとくっついたから段々変わっているかも分からないけれども、中国だってそういうことをいつでもやれる」

用田「中国こそやれるし、実際に２千何年だったですか、あの映像を流しましたよね」

水島「はい」

用田「台湾で日本が手を出せば日本は火の海になるという、核攻撃の事を言っている訳ですよ」

水島「うん、そうそう。言っていますね」

用田「彼はミサイルが通常弾でも撃ち込まれれば、即、核でお返しをするよと」

水島「そうです。彼らは通常弾でいいんですよね」

用田「だから台湾にはやらなくても、日本にはやるんですよ」

水島「いや、そうですよ。だから尖閣は危ないっていうかね、その一番、空白地帯になっているっていう理由になるんですけど、このイスラエルのやり方というか、こういうものに対して、まぁ、アラブ諸国も一応の非難は出しているんだけど、本当にこれでやると、自分が危なければ相手を抹殺してもいい。

例えばハマスに千何百人、殺されたから、５万何千人、殺したっていいんだと。これは、

もう殆どジェノサイドだと言って、私は非難しているんだけど、トランプの今の曖昧な態度というか、もっと言えばイスラエル寄りの態度に変わりました。変わったというか、そうなったのかね。この問題っていうのは本当に、さっき、ちょっと言ったようにモサドとかＭＩ６とかＣＩＡっていうのは、いかに物凄いか」

用田「凄いですねぇ」

水島「つまり、何年越しでイランを破壊することをやっていた。それで、さっきも言ったように、ハメネイ師をいつでも殺せますから一緒にやりましょうよと。一緒にやろうというよりも、了解を得ようとしたっていうのは、もう本当にトランプさん、あんたも、やっつけられるよと。あんただって、いつでもやれるよというお知らせでもあるというね。これ、もう、この諜報機関の跳梁跋扈というのはＡＩとか色んなものを使っているから」

用田「残念ながら、基本的に斬首攻撃、もう、あのう…」

水島「うん。斬首攻撃ですねぇ」

用田「所謂、斬首攻撃ですね」

水島「えぇ、首切りですから」

用田「今回のイランもそうだし、それからヒズボラもそうですよね」

水島「はい」

用田「あれ、見事にピンポイントで何年かかけて準備をしてやりましたよね」

水島「最高指導者全員をやっつけましたよねぇ」

用田「それで、まぁ、その通りかどうかは別として、何年か前に台湾の参謀総長のヘリコプターが落ちたことありましたね」

水島「あぁ、落ちましたね」

用田「正月に近い頃だったと思いますけども」

水島「はい」

用田「あれは絶対に真相を明かさないけれども、斬首攻撃だと思った方がいいと私は思っているんですね」

水島「うん、そうですね」

用田「だから、結局、今度は台湾とか日本とかを考えた時に、彼らは斬首攻撃をやってくる訳です」

水島「うん」

用田「日本に対しても…」

水島「やりますね」

用田「やります。だから、それに対する備えがありますかと」

水島「何もないです」

用田「コンテナがあるじゃないですか、コンテナからプンプンと無人機が飛んできたと。日本は、あちこちに置かれていても平気じゃないですか。何かも判らない。中国人が土地を買う」

一同「うん」

用田「そういうところから、国防動員法ってやつを忘れていましたけども、国防動員法ってやつがあるので、日本に居る中国人は軍務に服さなきゃいけない訳ですよ。彼らが蜂起して、それから、そういうミサイルが飛んで来たら、何のことは無い。内側で全部、やられてしまう」

水島「うん。そうですね」

石田「前半のお話にもありましたけど、結局、食糧が国防だし、エネルギーは国防じゃないですか。そう考えたら、今の状況っていうのは多分、戦争をする前に餓死しますよね」

用田「うん、餓死もするし、戦争が始まった途端に、全部が無くなってしまう」

石田「そうですね」

用田「肝心なところが」

石田「そもそも戦えないです」

用田「結局、弾薬だとか燃料だとか、今から沢山、積み増しますよと言って、今から積み増す計画なのかいっていう感じだけども、そこがピンポイントで狙われるんですよ」

石田「うん」

用田「日本のやつは全部、グーグルを見れば解るんです」

石田「台湾の軍事演習も、中国の台湾海峡の封鎖って項目に入っているじゃないですか。あそこを封鎖されちゃったら、日本に入って来る物が全部、ストップしちゃうから、結局、これだけ国内で食糧をつくれない、エネルギーも需給出来ない国が、あんなところで船を止められただけでね、もう日本も一巻の終わりですよね」

用田「結局、何もしなかったツケですね」

石田「う～ん」

用田「アリとキリギリスの世界が、さっきの米の問題も含めて、ばぁ～っと噴出している訳だけども、気が付かせないようにさせられてしまったんだけど、気が付いたら手を打たなきゃいけませんけどもね」

石田「そうですねぇ。だから本当に、さっき水島社長もおっしゃったけども、日本の上の方の政治家共は今、植民地政策に向ってまっしぐらですよ」

水島「途上国どころじゃないんですよね」

石田「ねぇ」

水島「落ちぶれるね。それと、やっぱり今言ったように一種のグローバリズムと言えるんでしょうけど、あの万博やＩＲっていうね、これはＭＧＭでしょ。オリックスも」

石田「うん」

水島「それから現実の運営は恐らく中国人中心だから、サンシティ・グループ、チャイニーズ・マフィアが入って来る。大阪港を中国が使えるように色々やっちゃっているっていうね。もう、正に租界を作っているっていうね、拠点を作っているっていうから今、３５０万人ぐらいの定住外国人がいるけど、更に８０万人を入れる。

それから川口のクルド族の問題で言うと、もう３千人も居る中で治外法権が出来ちゃっている。この間、県議さん二人と石井さんに来て貰って、このクルド人問題を議論したけど、全然、変わっていない。その時、ビデオを見せて貰ったんだけど、県議が車で、その辺のクルド人の集まるヤードって言うゴミ捨て場みたいな所へ行ったら、取り囲まれて、ピーって口笛を吹くと、監視カメラが全部、あって、みんな、集まって来て、お前は何をやっているんだぁっていう状態の映像を見せて貰いましたけど、もう、こういう状態が今、トランプがやっているロサンゼルスのデモとか２００万人が参加してとか言われているけれど、殆ど内戦に近いじゃないですか」

用田「あぁ、あれは、もう反乱ですよ」

水島「反乱でしょ」

用田「はい」

水島「だから、それも、みんな、メキシコの旗とか何だって立てるんだって、外国の旗を持ってデモやっている訳だからね。トランプが言うのも、アメリカ対侵略軍の闘いだ、みたいなね」

石田「う～ん」

水島「この問題は、やっぱり日本だって起きますよね。前に鈴木（傾）さんは覚えていると思うけど、例の長野のオリンピックの時の中国人の問題。あれは何年前でしたっけ、十何年前ですかねぇ」

鈴木（傾）「そうです、それぐらいですかね」

水島「あれでデモを動員して１万人も集めたんですもんね」

鈴木（傾）「そうですね。しかも普通の車に中国人が乗って、中国の物凄く大きな旗を振り回してですね、もう…」

水島「そうです。あのジュラルミンの棒は１本３千円するんですよ」

鈴木（傾）「あぁ（笑）」

水島「調べました。何本、あったか」

鈴木（傾）「そうですね」

水島「つまり、そんな金が何処から出ているのか、それから飛行機、チャーターバス」

鈴木（傾）「そうですねぇ」

水島「列車、物凄くお金がかかるんですよ。それを一時的に、連合とかだって全国動員で、中々集められないだろうっていうね。それで学生が全員、集まってやったことを思い出すと、それは遥か１０年前以上でしょう」

鈴木（傾）「そうですねぇ、それぐらいになりますねぇ」

水島「だから本当に、そういう意味で言うと、我々の国の中もガタガタに、さっき言ったように色々な分子が各世界に入り込んで…」

用田「まさに鈴木（傾）さんが書かれた本、『病み、闇。』と書いてある」

鈴木（傾）「あぁ、そうですね」

用田「日本は病気ですよ」

鈴木（傾）「そうですね、病気です」

用田「日本は色んな意味での病気にかかって…」

鈴木（傾）「えぇ。はい」

用田「大元は居るんだけども」

鈴木（傾）「えぇ。大元ですか」

用田「大元というのはグローバリズムだとか、こういうやつで、要するに国を破壊して、人格まで破壊して、文化伝統も破壊をしてしまうというものですね」

鈴木（傾）「そうですね」

用田「その外国人を儲けさせる為に、日本人が働いていると」

鈴木（傾）「はい。そうですね」

用田「だから賃金を上げると言っている首相が居るらしいですけども、その前に会社が無くなってしまっている訳ですよ」

一同「うん…」

用田「仕事で、皆さんが職人にならなければいけない。やはり、そういう石の上にも３年というぐらい３年ぐらいやらなきゃいけないのに今、転職、転職じゃないですか。テレビでやっていると。だから日本を浮動化させて浮かしてしまえという力が今、ずっと働いているっていう感じがしますね」

水島「うん」

鈴木（傾）「１９９０年にバブルが崩壊して、その崩壊する前にバブル時代があったんですね。その時から外国人が大量に入ってくるようになって、実は中曽根首相が進めたんですね。あの人は保守ですけども、当時の中国って、あまり力が無かったので、ちょっとぐらい中国人が入って来てもいいだろう、友好になるだろうというので、中国人を、どんどん入れたんですけど、それでバブル崩壊した時、じゃあ、外国人は皆、帰ったかって言うと

帰っていなくて、そこから益々増えて来たんですね。

２０００年に入って外国人は市民であるということで、２００５年ぐらいから役所が言い出した言葉が『多文化共生』ですよ」

水島「そうですね」

鈴木（傾）「この『多文化共生』が今迄、ずっと続いて来て、これは、もう日本の租界が出来るような、それぐらいの状況まで来ていて」

水島「いや、そうですねぇ」

鈴木（傾）「えぇ。だけども、これは、もう引き返すつもりが無いらしくて、日本に住む外国人を１千万人も増やす。インバウンドで６千万人増やす。だから、これだけでも７千万人ですよ。７千万人の外国人を日本に定住させて、或いは、観光させて、或いは旅行させて、もう日本っていう存在を消してしまうような動きが今、起きている」

石田「うん」

水島「起きていますね」

鈴木（傾）「はい」

水島「稲垣さん、我々は、ずっと大阪の問題に何度も関わって来たんですけど、京都も大阪も色んな所が買われていますよね。先斗町とかあの辺の周辺とか」

稲垣「はい」

水島「土産物店とかの殆ど全部、中国になっちゃったって聞いているんだけどねぇ」

稲垣「はい。京都も大阪も、大阪で言ったら難波とか、或いは西成とか、あぁいった所は、もう殆ど中国に乗っ取られているような状態で、難波は殆ど経営者が中国人になっていますし、その隣の島之内という所は三分の一が外国人が住んでいる訳ですね。まぁ、そこまでやられていると思いますけど、やっぱり、それは維新の会の政策っていうのを見て行けば、中国からの移民を大量に受け入れるっていうことで、元を辿って行くと、やっぱり今日も出ましたけど、その米の問題でも出ましたけど、大前研一さんが始めた平成維新の会ですね」

水島「あぁ、大前。そうそう大前だった。うん」

稲垣「これがマッキンゼー＆カンパニーの社員の方だったんですけども、維新の会っていうのは、その平成維新の会から名前とグローバリズム政策を継いで、今、それを実行していると。マッキンゼー＆カンパニーが同じようにプランニングしたのが、中国の一帯一路構想ですから、これは同じ根っこを持つもので、維新の会がやろうとしているのは、大阪を中国の一帯一路構想の中の一部に組み込むということを、長い時間をかけてやっているということです」

水島「う～ん。それと、せっかくだから聞くけど、万博について橋下さんとかが大成功とか何か言っているけど」

稲垣「（苦笑）」

水島「全然（失笑）、予想の定員よりも全然、一回も行っていないんだよね」

稲垣「うん」

水島「はい、どうぞ」

稲垣「『命輝く未来社会』ということですが、非常に命が輝いているのは、例えば、ユスリカですね、凄い蚊柱が立ち上がって命が凄く輝いているとか、あと、噴水ですが、汚染水を噴水にしちゃったもんだから、レジオネラ菌という菌が凄く輝いてしまっているという状況で、あとはメタンガスですね。まぁ、こういった形で、本当に大阪の人達とか、そういった人達の命を粗末にしているのは間違いないので、こんな維新の会の大阪万博を成功だなんていうのは、もう、ちゃんちゃらおかしいというか、そういった感じもするんですけど、やっぱり大阪万博の目的自体がＩＲですね。カジノをやる為の土地整備の中抜きの為に万博を利用していると」

水島「うん」

稲垣「そして大阪万博の推進協会の目的にも書いてありますけど、スマート・シティを目指すということです。ＳＤＧｓとスマート・シティを目指すのが大阪万博だということで、やはりスマート・シティというのは、結局、外国勢力によるデジタル管理都市ですから、やはり、これもグローバリズムというところで、方向性が完全に一致してしまっていると思います」

水島「そうですよね。それと、やっぱり、あの辺で今回、次の選挙がありますけどもＩＲの工事は、もう始まっているでしょ」

稲垣「はい、万博の工事と並行して、しっかりと進んでいます。土地の工事ですね。見に行きましたけど、盛り土とかがちゃんと出来上がっていましたね」

水島「これね、よく財政出動論で言われるんだけど、万博周辺整備を入れると１３兆円もかかると言うんですよ」

石田「はぁーっ」

水島「ちょっと待ってくれよと。万博自体は予定が２７００億円ぐらいだったかな、今、1兆１千億円から１兆３千億円、いくって言っているんですよ。これは間違いなく１兆円を超える。これは、もう間違いない。これだけ赤字が出ている。７千億円から８千億円…、さっきの５千億円で、農民が全部、助かるって言うけど、こんな無駄なことやっている。

じゃあ、採算が合うかと言うと、絶対に合わないですよ。今回の万博は採算が合わないです。券をばら撒いているけども、本当に真面目に買っている所は殆ど無いから。会社に、２５％セールみたいな形で、みんな、やっているから来ていますし、今日も３４度と暑い。万博をやっている大阪だって３４～５度ですからねぇ。

こうなったら本当に夏は大変ですよ。万博が終わったあとも、あの夢洲の所のごみ溜めの所ですが、完全に今、杭は打っていますから、物凄いお金がかかっているんですよ。万博は浮いたまま造れる工法になっているので、３階以上の建物は無い訳ですね。

これは建築の人に聞いたんですけど、つまり今回、万博じゃなくて、今度の整備が１３兆円もかかるっていうね。これは大阪の為になるのかな、どうなんだろうなと思っていま

す。だってお金は国と大阪府民が負担する訳ですよ。あの松井という元知事ですか、彼が採算が合うって、採算ベースに乗せるのは５５年後って言うんですよ。５５年後なんて、みんな、死んでいますよ（失笑）、申し訳ないけど。うん、あぁ、もしかしたら、石田さんはしぶとく生きているのか判らないけども」

石田「（頷く）（微笑）」

水島「本当にねぇ、こういう計画が、さっき言ったように農業で５千億あれば、農民が救われるみたいなことを言っている時、１３兆円を使って、大阪、どうする。それで主体の経営自体がオリックスとＭＧＭでしょ。まぁ、はっきり言いますけど、最強のユダヤ・マフィアですよ。ＭＧＭっていうのはハリウッドの映画会社でもあるし、世界にはイタリアン・マフィアとかチャイニーズ・マフィアが有名ですけど、一番強い、世界最強はユダヤ・マフィアですからね。

このＭＧＭが主体でやって、オリックスも一緒にやるっていうけど、運営は多分、サンシティだろうと言われている。そうすると、日本人が入り込む余地は無いですよ。どうやったら、つまり雇われるのは恐らく英語と中国語でしょ。日本語で、大阪の市民が１億円も２億円も使う様な奴は、そんなに居ないですからねぇ」

用田「大体、都道府県レベルで本当に見事に根を張っている、私は恥ずかしながら福岡県に居ますが、県を上げてワンヘルスをやっているのは福岡県です」

水島「うん…」

用田「それで獣医師だとかと一緒になって、子供にもワンヘルス教育をしているんです」

水島「あぁ。うん…」

用田「ここでやっていたのかという話だと思いますね。この間、北海道の旅行をしてきましたけど、北海道の小樽とか洞爺に行くと日本語が聞こえないですよ」

石田「う～ん、あぁ、凄いですよね」

用田「もう町中、全部が韓国語と中国語」

水島「そうですよ」

用田「そういう営業しか出来なかったっていう問題もあるんですけどね」

石田「うん」

用田「だけど本当に日本では無くなってしまったっていうのを、だから、それを県知事とか道知事とか、そういう人達が後ろからバックアップしている訳ですよね」

水島「いやいや、そうですよ」

用田「支援していますよ」

水島「返って進めているんですよ」

用田「進めているんですよ。だから、私は新聞にばぁっと載っけて、ワンヘルスを一番、初めにやったのは福岡県ですって出てきている訳ですよ。こんなに根を張っているんです

ね」

水島「うん。だから、今言ったように北海道も今、ニセコがバブルだって言って、一時、ラーメンが一杯３千５百円だっていうねぇ。何度も言っている事ですけど、私も半年前ぐらい前にニセコへ行って、あの一泊２００万円のホテルに行ったけど、やはりサンシティの人達ですよ、やっているのは。マネーロンダリングとか色々やっている。１泊２００万円って、どういう豪華なホテルかって言ったら何でもないですよ。普通のビジネスホテルでプールも何も無いですよ。

そういうような所が、みんな、行われているっていうね。こういう状態ですから、結局、農業も北海道の食糧自給率は１００％以上、百何％ですか２００％って言ったかな。ところが、これは、みんな、輸出へ回すって言ってね。だから植民地農業をやろうとしている訳ですよ。国民の為にその２００％の米を、ちゃんと作れば、あそこは、それこそ、私は反対ですけど、棚田とか何かでやっている農業と違って、帯広とかを見れば物凄く広大な広い土地だから、北海道は、それをやれるところですね。これを全部、全部とは言わないけども、中国に譲って行くっていうね。

それから株式会社ですよね。株式会社化。うん。本当にとんでもないことを日本の政府が今、やろうとしているって。ところで杉山さんにも今日、ちゃんと聞かなきゃいけないのは、日本の政府のエネルギー政策、大丈夫ですか。これは全然、大丈夫じゃないっていう気がするんですけど」

杉山「じゃあ、これを準備したので丁度いいから話しましょう」

水島「はい」

杉山「今迄、話したことのないやつも、ちょっとお話しますけどね。この間まで、国会でやっていて、国会で通ったのが、この排出量取引制度っていうやつですよ」

水島「はい」

杉山「これは何をやるかって言うと、ＣＯ２を出したければ、この排出権っていうのを持っていないと、排出してはいけませんって言うんですよね」

水島「うん」

杉山「その排出権というのは国から、ただで割り当てて貰うか、或いは、国から買って下さいっていう訳ですよ」

水島「うん」

杉山「国がポンチ絵描くと、何か、それで取り引きして丸く収まるみたいな、丸く収まりますみたいな絵になっているんですけど、だから、これねぇ、実は総量規制ですね。この排出権を持っていないと、要はＣＯ２排出できない訳であって…」

水島「あぁ、じゃあ、仕事を増やせないんだ」

杉山「日本の排出量は、もう、これだけって国が総量を規制する訳ですよ」

水島「うん」

杉山「これって、実は凄い、とんでもない話で、日本のＣＯ２排出ってあるんですけどね。この内の電力と産業のところが大体、この排出権取引の対象になる訳ですけど、電力と産業、鉄をつくるとかね、本当に日本経済の根幹になるところで、これの何が拙いかって言うと…」

水島「それを本当にする気かっていう」

杉山「この国のＣＯ２の総量って、今、どうなっているかっていうことですね」

水島「はい」

杉山「２０１３年から、ずぅっと減り続けているんですけど、２０５０年にＣＯ２ゼロにするっていうのが国の目標ですよね」

水島「はい」

杉山「その中間目標っていうのも、これは全部、直線の上に乗っている数字が（失笑）あるだけですけど、２０３０年までに４６％減らしますとか、まぁ、こうなっている訳ですよ。これね、よく考えたら経済活動するのには、燃料って必ず燃やさなきゃいけない訳ですよ。工場だったらボイラー、それから発電する時だって、やはり火力が一番、多い訳です」

水島「必要ですからね。はい」

杉山「それを使わなくするって、これ、直線的に減らすって言っている訳ですよね」

水島「うん」

杉山「これまでのところ、直線的に確かにＣＯ２減ってましたっていう風になっているんですけど、その理由っていうのは、もう産業空洞化ですよっていうのは、これは分析すれば明らかになっていて、要は工場がどんどん減っているからＣＯ２が減っている訳ですよね」

水島「それだけの話だよね」

杉山「えぇ、それだけの話なのに、我々は順調にＣＯ２を減らしてますって…」

水島「とんでもないね」

杉山「大臣とかがとくとくと喋っていて、だから、このまま直線的にＣＯ２ゼロにするんですっていうのは、国の計画で、こういう数値目標がある時に、この真っ直ぐＣＯ２減らしますっていう目標がある時に、ＣＯ２の総量規制の制度なんか入れちゃったら、どうなるかって言ったら、もう日本で工場も回せなくなる訳ですよ」

水島「空洞化を推進しているだけだね」

杉山「空洞化を推進している」

水島「はい」

杉山「だからね、もう、これは経営者だったら日本には工場、建てるなということかと」

水島「うん、そういうことですよねぇ」

杉山「なんだったら、アメリカに行って投資しましょうとかね」

水島「なるほど」

杉山「インドに行って投資しましょうとか、そういう風になる訳ですよ」

水島「うん。はぁ～～」

杉山「それが実際に起きていると」

水島「ね」

杉山「その政府はＣＯ２ゼロにする為に何をやっているのかって言うと、このグリーン・トランスフォーメーション、ＧＸとか言うんですけども、１５０兆円を１０年間で官民で投資させると。これを規制したり補助金で投資させたりとか言うんですけど、そんなことをやっていて、この中身は殆どが再生可能エネルギーとその為の送電線だとかバッテリーだとか、そういう話ですよ。

１０年で１５０兆円ですからね。毎年のＧＤＰの３％。防衛費を増やすぞと何かやっていた時に２％で大騒ぎしていましたけれど、こっちは３％。とんでもない金額ですよね。

しかも投資して経済成長するんだっていうのが政府の言っている事ですけど、そんな、態々割高な太陽光パネルだとか風力発電だとかに投資して、経済成長するはずがなくて、実際、この政府関係のシンクタンクが試算したら、これをやると、２０３０年の時点で、年間３０兆円の所得が失われますよと。ＧＤＰが失われますよって言っている訳ですね。まぁ、こんな状態でして」

水島「これは凄い話だね」

用田「それは何処の研究所ですか」

杉山「あぁ、これはライトって言って、経産省系のシンクタンクですね」

用田「そこが、これを出しているのに…」

杉山「これが出している」

用田「それを無視しているの」

杉山「そう（苦笑）」

水島「だから、サラリとおっしゃっているけど、凄い話ですよね」

杉山「本当にねぇ」

水島「日本の経済を破壊する総合計画ですものね」

杉山「そうなんですよ。それで日本の電気はどうなるかって言うと、２０４０年には再生可能エネルギーが４割から５割にするって言っていて、これは、要は太陽と風力を今の３～４倍にするって言っているんですね。それは全電気の３割から４割は太陽、風力にすると。残り１割は水力なんですけど」

水島「うん」

杉山「こんなことをやると、どうなるかと言うと、物凄くコストのかかる話になっちゃって、２０４０年に電気を供給するのに何が安いかって言ったら、今、ある発電所を回すのが一番、安くて、それは原子力発電所であり火力発電所ですね」

水島「はい」

杉山「ところが政府は、火力発電所はＣＯ２出るから、けしからんって言って、どんどん減らすんです。今、あるのを回すのが一番、安いんですけど、それで足りなければ、その２０４０年に向って新たに火力発電所を造ればいい、原子力も造ればいいのに、原子力は間に合わないかもしれないですね。

だけど、政府は基本的に火力発電所は、もう造らんと言っていて、何をやるかって言ったら太陽、風力とかって、あとは、もうＣＣＳってＣＯ２が発生したら、それを地中にポンプで埋めますみたいなことを言っていて、どれも物凄く電気代、高くなる訳です」

水島「うん、お金がかかりますねぇ。値上がりしますね」

杉山「これを見ただけでもねぇ、もう、日本に工場を造るのはやめようと思っている経営者はいっぱいいるでしょうけど（失笑）」

水島「いや、企業だったら絶対につくらないですね」

杉山「こういうことを排出権の総量を規制することで、こういうこともやっていくっていう訳ですね」

水島「はぁ～～なるほど」

杉山「それで、さっきから、お金の話が出ていますけどね、今、米騒動で、年間の日本の家計が買っている米の代金って合計で１．５兆円」

水島「うん」

杉山「だけど、これは電気代に比べれば大分、安くて、再生可能エネルギー賦課金って、その太陽風力を導入する為に電気代に上乗せされて徴収されているお金があるんですけど、それが年間２．７兆円です」

水島「そんなにあるんですか」

杉山「これが現在、それだけあってですね」

水島「そうかぁ」

杉山「しかも、これが、これから、そのＧＸって政府が言っているので膨れ上がって行って、年間１５兆円規模になるって言っているんですね」

水島「それと、もう一つは、今、何処でもそうだけど、北海道や色んな所でやっている太陽光パネルでやっている会社がね、上海電力とか、みんな、中国系の会社になっているんでね、だからお金が何処に入るかって言ったら、そっちへ行くんですよね」

杉山「そうですよね」

水島「ね」

杉山「その話を、これから少ししたいんですけど、１５兆円っていうのは投資の金額で、日本経済の損失、みんなの所得の損失っていうのは年間３０兆円になるんですよと」

水島「うわぁ～」

杉山「一体、何にお金を使って何をやっておるんだっていうことですよね」

水島「自分の首を、どんどん絞めているんだよね」

杉山「トランプ関税の話は、さっきも出ていましたけども、譲っちゃいけないものを譲るのは本当に愚かな事ですが、ただね、エネルギーに関しては、機会と捉えた方がいい場面もあって、対米貿易黒字って今、９兆円ですね」

水島「うん」

杉山「防衛費を増やして、その調達を少しアメリカからやるとかいう話もあるし、だけど、私が注目しているのは、この一番、端っこの化石燃料の輸入代金ですね。これが毎年２７兆円もある訳ですね」

水島「もう、一発じゃないですか（失笑）」

杉山「この内、今、アメリカから買っているのは１．３兆円です」

水島「あぁ～」

杉山「だけど、この化石燃料輸入の大半は、実は、今、中東に行っていて中東だけに頼っていると危なっかしいことがあるので（苦笑）、ある程度、アメリカから買うようにするっていうのがあると」

水島「うん」

杉山「実際、アメリカのガスを買うとかいう話が今、出て来ているんですけどね。まぁ、このアメリカからエネルギーを買うと、中東にだけ一極集中している状態から、バランスを替えるっていうのは、実は日本にとって悪い事ではない」

水島「うん」

杉山「エネルギー安全保障の観点で。台湾封鎖の話とかもありましたけど、アメリカからエネルギーを買うと何がいいかって言うと、まぁ、これですね、これは日本中心に同心円を描いてみたんですけど」

水島「うん」

杉山「北京とか上海とかで２０００キロぐらいですね。このぐらいだと、もうミサイルでもドローンでも何でも飛んできますので、いざ有事ってなったら、日本に近づく船って狙われる訳で、そうすると日本に入って来られないっていうことは充分、想定しなきゃいけないと。

アメリカからエネルギーを買う場合は東からやって来るので、地理的にはマシですよっていうのと、あとアメリカの荷物を積んでいれば、中国もさすがに攻撃は、し難いっていう

ような、そういう側面はあると思うんです」

水島「うん」

杉山「これも含めてアメリカからエネルギーを買うということは、やっておいた方がいいんじゃないかと」

水島「うん」

杉山「話の最後にね、さっきの排出量の総量規制の排出量取引の法案っていうのも、オール与党、ほぼオール与党で、この間、衆参両院で通ったんですね」

水島「あぁ～」

杉山「反対したのは基本的に参政党と日本保守党だけです」

水島「あぁ、その二つだけですか」

杉山「あとは、みんな、グリーン万歳という感じ（苦笑）、脱炭素万歳というですね」

水島「これね、本当に、普通に事実が解れば拙いんじゃないの」

杉山「それでね、もう世界では、みんな、結構、解っているんですよ」

水島「あぁ」

杉山「ヨーロッパでは昨年、よく、こういう光景が観られて、何をやっているかって言うと、トラクターが首都に行列してデモに出かけて行って、何に反対しているかって言ったら、環境規制が厳し過ぎて、農業が出来なくなるから、やめろということを言っているんですね」

水島「あぁ」

杉山「これは割とお行儀のいい写真ですけど、場合によっては、堆肥をビルに吹き付けるだとか、糞尿をまきつけるとか（笑）、めちゃくちゃなことをやっているんです」

水島「あぁ～」

杉山「でも環境問題、環境規制っていうのが、このヨーロッパだと、もう凄く政治の争点になっている訳で、こうやって気がついて見ると、トランプのアメリカは脱炭素もやめるんだと、はっきり言っていますと」

水島「うん」

杉山「パリ気候協定からも離脱ですと言っていると。この上の真ん中の写真はイタリアのメローニさんですね。彼女の政党も、ＥＵ全体のＣＯ２の目標っていうのは、さすがに反対できないんだけど、だけど環境規制を強くするだとか税金を入れるとかいう時には、必ず反対しているんですよね。この下の方に最大野党って書いてありますけど、これはイギリスとドイツとフランスの党首ですけども、実は、彼らも脱炭素で、これはお金がかかり過ぎるし、産業も潰れてしまうし、光熱費が上がるから、もうやめろということを言っている訳でね。気がついてみたらアメリカ、イタリア、ドイツ、イギリス、フランス、もう大国は、みんな、与党か、或いは、最大の野党が脱炭素っておかしいでしょうということ

を言うようになっているんですよね」

水島「う～ん」

杉山「特に、この人は今、割と最近、イギリスの保守党で党首になった、ケミ・ベーデノック（Kemi Badenoch）という人ですけど、この人の言っている事が凄くて、ネット・ゼロって、これはＣＯ２ゼロにするっていうことですけど、２０５０年までにＣＯ２ゼロにするというのは、もう、これはファンタジーだと。何も根拠がないと」

水島「うん」

杉山「それから、Promising the Earth って出来っこない約束をしていると。それから、Costing、金もかかると。もうケチョンケチョンに非難をしていて、こういう人が保守党の党首ですからね」

水島「まぁ、さっき言ったあれだね」

杉山「イギリスだと労働党と保守党が時々替わりますから、もう、そういう状態になっていると」

水島「うん」

杉山「それで調べてみたら、この議席のシェアで見ても支持率のシェアで見ても、もう、脱炭素っていうのは、何処の国でも反対派っていうのが、結構な勢力になっているんですね。日本は何処に居るかと言うと一番、端っこの所に日の丸を付けておきましたけど（苦笑）、参政党と日本保守党しか反対していないので、殆ど、ほぼオール与党で未だ、この脱炭素を推進しておるという状態ですと。

最後、広告ですけど、そちらにも置かせて戴きましたけど、この『データが語る気候変動問題のホントとウソ』という本を書きまして、今日は言わなかったですけど『災害激甚化』だとか、まぁ、そんなこと別に起きていませんよと。この経済とか安全保障の方が、よっぽど切羽詰まった話ですというのは、そういうことが解るようにデータで纏めたものです」

水島「でも、杉山さん、この脱炭素っていうミッション、私はこれを科学事実よりもイデオロギーだと思っているんだけども、こんなイデオロギーが、もう何十年も続いて来ているじゃないですか。これ、実は嘘だって判ったら本当に大変なことですよね」

杉山「いや、もう、ですから…」

水島「解っている人はもう解っているでしょう」

杉山「解っている人は解っている。言い出しっぺだったのがイギリスとかドイツですけども、特にＣＯ２ゼロとか極端なことを言い出したのは、実は割と最近で２０１９年ぐらいからなんですよね」

水島「う～ん」

杉山「さすがに、それを目指して色々な規制をやると、イギリスもドイツも光熱費がどんどん上がっちゃって、産業は空洞化するし、家計は苦しいし、もう、こんなの馬鹿らしいからやっていられるかっていうので、大きな政党が反対するようになっているんですよ

ね。日本だけが相変わらず周回遅れでやっている」

水島「しかも参政党や日本保守党は、何人かしか居ない少数野党じゃないですか。あと殆ど何百人は全部、これに賛成したっていうのは一番、ショックだみたいなね」

杉山「えぇ、そうです。自民、公明、立憲民主、国民民主」

水島「大政翼賛会ですよ」

杉山「共産党は、もっと厳しくしろって言って反対したんですけどね（笑）」

水島「さすが共産党というかね」

杉山「（笑）」

水島「もう馬鹿の塊みたいなもので。あ～、でも、これって彼らはどうなんですか、現実的に世界はこうなってきているじゃないですか。少なくとも疑って、こんなもの簡単にやっちゃいけないと思い始めているのに、何故、日本だけが９９％近く…」

杉山「そこは今、メディアを見ても未だ脱炭素は世界の潮流であるって、大手新聞を見ると全部、書いてありますけど」

水島「だから、これはこれで、杉山さん、ざっくり言うと、これで儲かった奴は誰なんですか」

杉山「あ、それは沢山、居ると思います」

水島「沢山、居る」

杉山「太陽光発電の事業者は儲かるし、多分、そういうところの議連とかの人は何か関係あるんでしょう」

水島「う～ん、いや、これねぇ、この間、別の討論で話題になった半導体のラピダス。ラピダスの為に、泊原発を再稼働するっていう話になっているじゃないですか。でも現実に、あれが無いと北海道は全くやれないですよね。やらなきゃいけないのに、あれだけ全然、やらなかったのに、ＧＥね、ジェネラル・エレクトリックとか、こういうのが入って来て一緒にやるとなって電気が必要だと。だったらラピダス。泊原発をやるって言うんですよね。

つまり外国資本が中心になるとやって、そうじゃない時は絶対にやらせないっていうね、北海道で、そういう話を聞いていたんですよ。地震があった時だって火力発電所も増やさないし、原発の再稼働も全然、論議として出なかったです。本当にどうなっちゃったんだろうと。議員の頭とかね、単に、これ…」

用田「日本全体が先程の話じゃないけども、空気の支配って言うか、他所から、出る釘は打たれるじゃないけども、そういうのを嫌がる傾向にあるんですけどね」

水島「う～ん」

用田「その答になるかどうかは分からないけども、今回の『危機の日本が直面する諸問題』で…」

水島「はい。それをお話し下さい」

用田「ピントが合っているかどうかは、私も自信がありませんけども、いやいや、日本はどうして、こうなるかと（笑）」

水島「（笑）」

用田「『何故、日本人は自立し独立しないのか』、『何故、原因を追究せず結果しか見ないのか』。これは原因を追究していないですよね」

水島「そう」

用田「これも全部、日本人自身が、それが結果だけがこうだよと言われたら、何も考えないで基本的に脱炭素だよねと」

石田「思考停止」

用田「思考停止」

水島「思考停止だよね」

用田「思考停止。それで『何故、深い洞察力を失ったのか』ということを考えると、未だ全部、私の答じゃありませんけどもね」

水島「うん」

用田「やっぱり３つの深刻な病。闇があると」

鈴木（傾）「はい」

水島「うん」

用田「それは一つ、先程から話に出ている『グローバリズム』というものの闇です」

水島「うん」

用田「病ですよね。日本は何処に行っても、だから北海道へ行った時も、私は、ちゃんと心ある人と話したつもりだけども、プーチンは怖いとか、ロシアは酷いとか、こういう話が出てくる訳ですよ。纏めると北海道自体は、ここが南西防衛自体も北海道が安全、所謂、ロシアが安定しているっていうことが前提ですよね」

水島「うん、そうですね」

用田「部隊は、もって行けないんですよ。それなのに敵にするのかいっていう話ですけどもね。日本は反プーチンと反トランプですよね」

水島「うん」

用田「それはグローバリズムの話は、皆さん、よくご存じの通り国家とか歴史とか伝統とか人格を破壊すると。だから、どういう訳か、そういう勢力だ、そういう力が物凄く働いているんだろうと思います。そこが一言で言うと、全てに渡って国民を犠牲にしている訳ですね。平気な訳ですよ。でも、それでもいいと、国際組織だとか多国籍企業の利益を優先して、原因を考えさせずに結果追及の刹那主義の蔓延と」

水島「うん」

用田「だから、私が北海道で一番、ショックなのは、やっぱり、ここで、こういう議論を沢山していても、大半の国民の皆さんはメディアとかテレビとか新聞とか、全ては、それしか大本営発表しか言っていないんですよね。だから、どういう訳か、この日本は、お上の言う事は、新聞に書いてあること」

水島「うん」

用田「これは正しいと思う人達が、読売新聞のあれでは、所謂、本当にそうなのかと思いますけども、７割、８割はそうだと言うんですよね。そういう人に頼り切る、我々はグローバリズムというものに狙われてやっていると。だから真ん中に書いている様に、日本人はクラゲになっちゃったんですね」

水島「うん」

用田「何も考えない、クニャクニャで右でも左でも行きますよと、こういうことになっているんだと。それから、もう一つは、皆さん、賛成、反対、色々あるでしょうけども『精神の病』

水島「うん」

用田「柱が無くて漂流する日本。これは根本的に、非常に大きな問題だと私は思っているんです」

水島「そうですね」

用田「仏教精神っていうことをポンとあげていますけども、あとで、ちょっと言いますけど、明治維新でやったことの良い事と悪い事がやはりある訳ですね。それから戦後日本も基本的に良い事、悪い事があったけども、有耶無耶にしてしまっているんですよね。で、精神の病というのは仏教精神と何故、書いたかと言うと、善悪だとか因果だとか、これには全部、入っているんですね。今、日本は善悪も因果も考えない」

水島「うん」

用田「そういう世界になっているんですけども、思索、考える気概を失って、空気の支配に陥る。だから軽薄な日本人に世界の大変革は見えないと、私、書きましたけども、例えば、私がよく言うのは、赤穂浪士の討ち入り、あれは太平の世をぶち壊すテロだと、日本人が、みんな言っている訳です。ところが、それは原因を考えた時に、あれが美談になる訳です」

水島「うん」

用田「だからプーチンが言うように、根本的原因を、はっきりさせようじゃないかと」

水島「うん」

用田「事が起こらないようにと」

水島「うん」

用田「そうなると、それは、いや、やめろと、停戦だけでいいという風になってしまって

いる訳ですね。だから日本は、みんな、それに同調してしまっている精神の病があるという風に、私は思っているんです。

それから３つ目は皆さんがよく言われるように『負け犬根性の病』ということで、そこに日本は最近、国民的英雄っていう教育をしないんだそうですね。学校教育ではどうも聖徳太子も居なかったという話らしいですね」

水島「そうさせようとしていますね」

用田「そういうことですね」

水島「うん」

用田「先程、皆さんがお話しになっている様に、日本を普通の国にしないというアメリカからの凄まじい力がある訳ですね。これはDefense Planning Guidance９２、１９９２年に作ったものが、戦争犯罪をやった日本は悪い国なんだから、これは一生、普通の国にしないと、こうなっている訳ですよ。だから、それを真に受けて、ずぅっと、読売も産経もメディアも全部、それを受けて日本を弱くする」

水島「うん」

用田「だから何のことはない、全部、これ、日本を弱くする政策を、一生懸命、我々日本人は推進をして来ている訳ですね。でもトランプで、それは崩壊をしつつあって、不介入とか中立、まぁ、トランプが今、ウクライナとかイランで示すのかどうか分かりませんけども、未だ不確定要素がありますけども、日本は外交防衛を取り戻す最後のチャンスなんだろうという風に思います。

それで、ここまで言わなきゃいけないのは、やっぱり明治維新の頸木を断てというのが二つ、あったと思うんですね。それは『行き過ぎた脱亜入欧』。やっぱり今の日本人もあるようにヨーロッパ、白人のやることは素晴らしいと思わされているんですけど、いやいや日本も素晴らしくて、アジアも素晴らしくて、日本は独立して自立しなきゃいけないよと。欧州、特にイギリスは、今やグローバリストの巣であって、人類の悪の結晶は、基本的にイギリスです」

水島「うん」

用田「私はそう思いますね（苦笑）。これは日英同盟だとか日露戦争の再来があると思ったら大間違いで、日英と組んだら日本は滅びると私は思いますね。

それから、もう一つ、日本は神仏習合の国であって、仏教、神道、並び立つ和合の国ですよね。それを捨ててしまった。今は捨ててしまったかどうかっていうことは、はっきりしませんけども、日本的には、やはり、これは両方が並び立つ和合の国だっていうこと。これは、世界宗教の仏教を柱として曖昧な日本人の誤解を解けと書いていますけれども、日本の神道というのは大切ですよ。

やっぱり日本の心の中、色んな小さなものまで、ずぅっと魂を見る訳ですけどもね、だけれども外国に行って話をした時に、お前のところの宗教は何だって言った時に、神道の説明は非常に難しいんですね。仏教は解る。やっぱりキリスト教とかイスラム教と並び立つという風に考えている訳ですから、みんな、真剣にこれを聞くんですよ。私が留学した時

もイスラムの国の人は、お前のところ、お前、何を信じているんだって言ったから仏教だと。仏教だって言って、こうだって言うと、いやぁ、俺達と考え方の基本は一緒だと。家族を大切にするとか、そういうことだねということで、外国に受け入れられる為には、やはり日本も明治維新の行き過ぎたところを変えなきゃいけない部分もあると。

それから戦後日本からの脱却というのは、もう既に全てが悪い国だという、これも皆さんは、ご承知の通りだと思いますけども、戦後の贖罪意識一色のメディアとか、尽きない災害の記憶の乱立と」

水島「うん」

用田「みんな、贖罪ですよ」

水島「うん」

用田「今のテレビを見て下さい。ＮＨＫのことをあまり言いたくない。主婦を敵に回したくないけれども、日本の朝ドラも今、凄いですよ」

水島「もう凄いですね、酷いですね」

用田「旧軍が悪で日本がやったことは悪で、そして、それがやったことが、どれだけ精神をおかしくさせてしまったのかというのを、毎朝、毎朝、ずぅっとやるんです。だから、それは前に向く力が無くて、単に苦しむだけの報道っていうやつが為されている訳ですね。これは自分達で払い除けるしかない。

もう一つは、曖昧な所と一致するんですけれども、ずっと前から言われたのは終戦なんですよ。日本はずっと敗戦じゃないんですよ。でも本当は敗戦しないんだから、二度と敗戦しない為に、日本はもっと国防だとか、核の議論も含めて、これを真剣にやりましょうねというのが本当ですね。

だから、終戦で敗戦、所謂、敗戦ということを意識しない中で何が起こっているかと言うと、今、イスラエルがイランを攻撃したのは、これは基本的に真珠湾攻撃だと言っている訳ですよ。それからウクライナがドローンを使ってロシアの奥の方を攻撃した、これも真珠湾攻撃だと言っているんですよ。その真珠湾攻撃と言っている裏側は、国際法違反で卑怯なことをやるのが真珠湾攻撃という言葉ですよ。

ところが実際に真珠湾攻撃というのはそうではないという気持ちが、昔の先の大戦の大義も日本にあったという風に我々は思っているんですけども、それ以上に、真珠湾の攻撃をやったことで遅れて責任を追及されている根本的理由は、当時の外務省が、これを基本的に責任をとっていない訳ですよね。外務省が宣戦布告を怠慢の為に遅らせてしまった。そうなんだっていうことをアメリカ人に話しても、じゃあ、それをやった人間が戦後、外務省の次官とか、みんな承認しているじゃないかと」

水島「うん」

用田「言われたら二の句が継げぬ、全然、反論できないですよね。これが今の日本ですよ」

水島「全くそうですね」

用田「所謂、敗戦っていうことを、しっかり…」

水島「本当は話していかなきゃいけないですね」

用田「はい。それで今回もイランを攻撃したイスラエルに対して、アメリカは真珠湾攻撃だって言う訳ですよ。ウクライナがロシアを攻撃したのも真珠湾攻撃だと言うんですよ。いつまでも、これを続けられて、日本人はそれに対して何の反論もしないということは、やっぱり日本人自身の問題だと思いますね」

水島「そうですね」

用田「もう一つだけ言わせて戴くと、長くなって申し訳ないですが、もう一つはグローバリストの気持ちからすると、ウクライナの根本的原因。プーチンの言う根本的原因を考えさせたくないというのがあるんですね。日本もそうですね。グローバリストの本性が判ると。

これが４つありまして、ひとつはトランプを倒して最後の砦のプーチンを倒して、英米の一極支配の波に乗ってグローバリストの無慈悲な連中の新世界秩序構築をしようとした企みがバレる訳ですよ。これをやろうとしていた訳ですけども、プーチンで止められた訳ですね。

もう一つは民主主義を守るという、高尚な目的ではなかったということが今、ヨーロッパとかアメリカでは言われているんだけど、日本では全く言われないんだけど、一つはＮＡＴＯを拡大してロシアを弱体化し、分割するという代理戦争なんだと。

それからＮＡＴＯによる世界の軍事一極支配の企みと。これはロシアを敵にして、日本だけが三正面作戦を強いられているんですけども、これは基本的にトランプが対中専念しろと言っている事と真逆な事を今、やっているんですね。だから、石破は、よくトランプに会えたなと思うんだけども、戦略的に根本的な考え方が違っていてね」

水島「うん、違いますね」

用田「ロシアだけを敵にするっていうことじゃあ、石破はトランプと面と向かって話をしてみろと、お前はと」

水島「うん」

用田「そういうことを言いたいんだけども、基本的にＮＡＴＯは、もう破れ傘で、そういう力もありませんけども、軍事一極支配というやつが、グローバリストの一つの大きな狙いであったということは間違いないだろうと思います。ただ、ＮＡＴＯの国は中国とは絶対に戦争しませんから、ここに助けに来るっていうことはあり得ない。

それから、もう一つ、ウクライナ紛争の根本的原因が明らかになると、欧米が正義だったっていう風に語りたい先の大戦、ベトナム、イラク戦争等、一連の戦争挑発の歴史が芋づる式に白日の下になる。

そうなると、先程の真珠湾攻撃に繋がるんですけどね、だからウクライナのやつをひっくり返して根本的に考えるだけでも、何故、同じことをやっているじゃんと。こういう話が判る訳ですよね。

３つ目、４つ目は、ＮＡＴＯの拡大と中国の核心的利益の拡大は、同じ拡張主義なんですよね。中国のやっている核心的利益の拡大、それからＮＡＴＯがやって来たこと。だから、何のことは無い、日本がよく言っている戦後秩序を破壊したのはロシアだと言っている。

そうじゃなくて、戦後秩序を破壊したのはＮＡＴＯだということが判ってしまうと。だから今、ちょっと長々と話をして申し訳なかったですが、要は根本的原因を追究する意欲も無くなってしまったのが今の日本人で、それが故に農業の問題もエネルギーの問題も表面的なところで全部、止まっちゃっているんですよね。

だから、それは深く考えるということを失ってしまった日本というのは、正に病だっていう風に思います。でも、それを治すのは自分しか居ないと。精神の病ですから」

水島「うん」

用田「まぁ、そこまでは、それが本当の答かどうか分かりませんけども、もう少し考えてみたいと思いますが、結構、深い病は自分自身がつくっていると思っていますね」

水島「今、用田さんがおっしゃっていた自分達がつくっているっていうね、これは極めて日本人的な心っていうか、自分達にも責任があるみたいなね」

用田「うん」

水島「それは本当は、いいことなんでね。だけど現実的に、我々が今、目の当たりにしているのは、実際に核兵器を持って、もう法律もへったくれもないんだ、自分達の命を守る為だったら異教徒や異民族は全部、絶滅しても大丈夫だっていうね、そのぐらいの意欲を持った、国家意志を持った強烈な政治指導者。こういう人達が居た時、我々はメチャクチャ無力になる。でも、これは中国もやり兼ねないですよ。イスラエルのやったことは中国も…」

用田「やります」

水島「やりますよ」

用田「うん」

水島「それから、もう一つは歴史的に我々のお馬鹿な左翼というか、日本人が、う～ん、自分達は悪い事をやったんだと、中国に迷惑かけたとか侵略をやったんだとかね、こういうものが未だ摺り込まれている限りは、今回、イスラエルがやったことは、本当に日本に適用されると思いますよ。

前に石平さんっていう評論家の人がしみじみ言ったのは、水島さん、中国人は、とにかく一度は日本人を、いやと言う程、こっぴどくぶちのめしたいと。これを一回やって、やらないと満足しないっていうことで、本当に雑談っぽく言っていたけど、これは本音だと思いますよ。

とにかく本当に中国共産党は、実は日本がそんな悪い事をやっていないっていうのは、毛沢東がずっと言っているように解っているんですよ」

用田「毛沢東は有難うって言いましたよね」

水島「え？」

用田「日本に有難うって」

水島「有難うですよ。本当に有難うですよ」

用田「えぇ」

水島「１００万人の蒋介石軍を殲滅した訳だから、それから、武器は全部、貰った訳で、そういう意味で言えば、毛沢東時代、鄧小平時代まで、革命世代は非常によく解っているんですよね。いかに日本軍が強かったかということも解っている、というようなことを考えた時、やっぱり用田さんが今、言ったその部分は全部、無くなりましたね。無くなったって言うか、これを取り戻さなきゃいけないんですけども、もう一つ、私も、ずっと明治維新のことを言い続けている人間なので、廃仏毀釈に証明されている様に、３つあると思うんです。仏教は勿論、仏教の様式が皇室の祭祀から全く消えた。もう一つ大事なのは朱子学」

用田「うん」

水島「つまり、実は孔孟の世界史、今、おっしゃっていた世界宗教のね、つまり中国から生まれた孔孟の道の朱子学と神道と仏教。これは本当に、おっしゃるように世界宗教的な基盤も、哲学というものを持った宗教としてあったのを、イデオロギーにしちゃった。皇国史観イデオロギー」

用田「だから江戸時代は、それが上手く回っていたんですよね」

水島「はい」

用田「だから明治維新でバツっと切ってしまったと」

水島「全くおっしゃる通りですね。それで近代化をする為にという理由になっていたんだけど、捨てたものは凄くね…」

用田「まぁ、勿論、それは功罪がありますけどね」

水島「えぇ。大きかったと思うんでね。ただ、それに気がついて大東亜戦争の結果も、そういうものがあるんだっていうところまで見ておかないと…」

用田「だから、とにかく真珠湾攻撃というのを、未だに言われている事が腹立たしくて、基本的にイスラエルが攻撃したやつについても、例えば真珠湾攻撃ですから、それから、ルビオもウクライナ側が攻撃した時にも、真珠湾攻撃の話を遠回しに言った。

だから、いつまでも日本は、あれを悪うございましたという、日本人が言っている部分がある。しかし、外務省は処罰を受けていないんですよね」

水島「うん」

用田「だから終戦って、何となく終わったっていう認識であって、日本は敗戦をしたという意識が無いですよ。厳しい認識は」

水島「私はね、この中で日本人らしいのは、麻雀をやっていて通告が遅れたっていうね。今、おっしゃったように、あの人は出世しているんですよ」

用田「そうです。次官になっているんです」

水島「これはねぇ、はっきり言って銃殺ですよ。それから真珠湾の起こった直後に、そういうのをアメリカにやっときゃいいんですよ。こいつらは国を誤らせたと。時間を遅らせたのは、麻雀をやっていたと。こんな甘い者は、我々の国は全部、銃殺したというだけでも大分、違ったと思いますよ」

用田「全然、違うと思いますよ」

水島「アメリカもね、あぁ、そうか、そういうことだったのかと。戦いは戦いでやるとしても、そういうことって今の日本人はそっくりじゃないですか。戦後の日本人はなぁなぁで済ませちゃう、そういういい加減な役人の態度を、やっぱり、そこは今、おっしゃるようにあると思いますけどね。

これからの問題で言うと、選挙もありますけど、さっき杉山さんが言ったエネルギー問題で言うと（失笑）、殆どオール野党、与党が、それは賛成で日本保守党が反対したって言うけども、正直言って一人、二人、三人ですからね。何百人の殆どが、植民地大政翼賛会になっているっていうね。これは恐ろしい世界だと思いますよ。

メディアも一緒でしょ。つまり、ここまで日本の支配が緻密化したと私は思うんですよね。今回、いみじくも、この農協の問題で言うと、第２の郵政民営化、１５０兆の農協と言うか農林中金とかのお金が運用資金としてやられて行くって言うけど、皆さん、どう思われますか。専門家の鈴木（宜）さんは５千億円があったら農民が救われるって言っているんですよ。５千億円ですよ。ウクライナへ、ぼんぼん３兆円、出したりね、万博やＩＲのような、あんなものは、我々のところにお金が入らないのに１３兆円も出すなんて本当に信じられない。

それから、もう一つ言うと、これは、みんな言われている事ですけども、消費税って、細かいことだけど、大体、消費税、あれは違うね、本当は、消費税じゃないっていうのを言いたいけども、少なくとも３５％、私の知る限り、経団連の輸出企業には全部、還付金で戻っている。

我々庶民だけが、みんな、払っているっていうねぇ、こんな理不尽なことは無いというようなことを、本当に一人一人、皆さん、腹立ちませんか。いや、腹立っているから、ずっと、おっさんの私もいい歳こいて頑張っているんですけどね（笑）」

一同「（笑）」

水島「やっぱり、こういう皆さんのような、凄く真面目な参加者の皆さんを見ていると、日本も未だ諦めちゃいけないという気がしているところもありましてね。今日のお話は色々な分野がありましたけど、石田さんに、一つ聞きたいのは、このイランとイスラエル戦争は、あまり予想も未だつかないけども、ペルシャという非常に歴史の深い大きくて強大な国だと思うんだけど、これを、そのまま、はい、チャンチャンっていう形で、痛み分けみたいな形でやめるとは思えないんですよね」

石田「うん」

水島「私は、もう、それは多分、トランプも知っているんじゃないかと、分かっていながらやっているじゃないかっていうのが、この間、矢野さんっていう、いつも用田さんと出

て貰っている方ですけど、私達が議論したのは、長い目で見ると、ネタニヤフ政権をやるだけやって交替させると。ゼレンスキーも、もう、やるだけやったから追い出させる結果をトランプが作って、プーチンと話したのはそこなんじゃないかと。だから勝手にやらせると言ったのは、実際にはウクライナの場合、勝手にやるというのは殆ど見捨てることでしょ」

石田「う～ん」

水島「イスラエルの場合も、勝手にやらせるという状態を、ロシアとアメリカが、もう、そういう秩序をつくろうとしているんじゃないかなっていうね」

石田「うん」

水島「これは希望的な観測でもあるんだけれども…、それとアラブ世界というのは、もう、ないのかなぁというね。我々は昔の中東戦争を知っている訳ですよ。アラブ連合なんてやって、エジプトやシリアや、みんな、イスラエルと戦争をやったりしていた姿を見ているんだけども、石田さんは、この現場によく行かれる方なんでね。これは、どうですか」

石田「う～ん」

水島「アラブ人気質と言うか、ペルシャ人気質も」

石田「う～ん。まず、そうですね、イスラエルのネタニヤフがどうなるかっていうのは、何とも言えないというか、分からないですよ。中々読み切れないところがあって、でも目先は、さっき冒頭でも用田さんと話したように、空中戦オンリーで行くんであれば、お互いの兵力が多分、底を突くから」

水島「うんうん」

石田「だから何処かのタイミングで、一旦、休戦にはなるんだけど、でも水島社長もおっしゃったように、イランはもうメチャクチャ顔に泥を塗られたようなものですから、あの文明の国、ペルシャがね。だからハメイニ体制が、ある程度、もう一回、再構築をした上で何処かのタイミングで、また大きな戦争になるっていうのは充分、考えられると思うんですよ。結構、近い将来だと思いますね」

水島「うん。あぁ、準備してね」

石田「準備して」

水島「はい」

石田「準備して、その体制の立て直しは、割とそんなに時間はかからないと」

水島「うん」

石田「それでナタンズの核施設の復旧も、結構、時間はかからないということを、まぁ、知り合いのイラン人の博士は言っていました」

水島「あぁ、言っていた。うん」

石田「だから、さっき言っていたサウスパルスの油田と天然ガス田は…」

水島「油田ですね」

石田「あれ、経済的ダメージが、かなり大きくて、あっちの復旧は、時間がかかるんじゃないかと」

水島「うん」

石田「核施設に関して言うと、もう地下１００メートル以下の所にその心臓部があるので、復旧に関しては、そんなに時間かからないんじゃないかということは言っていますね」

水島「なるほどね」

石田「体制立て直しも、そんなに時間はかからないんじゃないかと」

水島「石油施設に関しては、アラブ諸国が手助けしますか。ＯＰＥＣの人達は」

石田「うん。そこですけど、これも、さっき水島社長がおっしゃっていたアラブ社会は、どうなんだっていう話は、もう一言で言うとイデオロギーよりも経済」

水島「実利。はい」

石田「実利だと思うんですね。だから、そういう意味では、自分達にとって利益があるようであれば、場合によってはサウジアラビアはイスラエルと組む可能性もある」

水島「うん」

石田「その逆もある。イランと組む可能性もある。だから、そういう意味ではサウジアラビアは、非常に全方位外交をしていて、ロシアとも、まぁまぁ上手くやっているし」

水島「なるほどね」

石田「アメリカのトランプ政権だったら、アメリカとも、まぁまぁ上手くやって」

水島「うん、ちゃんと訪問しているもんね」

石田「そうですね。この間、トランプの一か国目の訪問はサウジアラビアだったじゃないですか」

水島「そうです」

石田「それでサウジとＵＡとカタールで、トータルで日本円換算で２９０兆円」

水島「うん」

石田「それでトランプは、もうガッツリと引き出して来た訳ですよ。今、言われているのが、サウジアラビアとか、あまり、そんなにお金がないんじゃないかと」

水島「うん」

石田「結構、財政がきゅうきゅうだぁみたいな報道も結構あるんだけど…」

水島「うん、よく言われるね」

石田「一時期に比べたら原油収入は減っていて、財政は一時期よりも悪くなっているんだけども、それにしたって百何十兆円とか、アメリカにぽぉ～んと払う訳ですよ。だからはっきり言って、財政が苦しいからって言うと、実はそうじゃなくて、一時期よりは確かに悪くなってはいるけれども、でも間違いなく湾岸諸国の中で、盟主であってね、一番、資金力もあるし、石油もあるし、さっき言ったように水もあるし、場合によっては食糧自給率も高めている」

水島「うん」

石田「今、世界からラブコールを受けている国がサウジアラビアなので、そういう意味では、ある程度、このバランスをとりながら色んな国との全包囲外交で、サウジは正にイデオロギーよりも経済を執る」

水島「うん」

石田「場合によっては、宗教、宗派とかも全く関係なしにして、自分達にとって国益になる方を、どんどん選んでいくという動きになっていると思うんですよね」

水島「なるほど。例えば、そういう中でね、イスラエルともやるということでバランス・オブ・パワー的な問題で言うと、イランは、これで、ある意味で言うと、向こうがどう言おうと、核を持つ権利を持ったということでね。やられると」

石田「うん」

水島「何かやっても、必ずこういう風にやられるんだと」

石田「うん」

水島「世界中のみんなに、こういう事実、制空権まで取られて人を沢山、殺された。だから、これで核を持つ権利を持つみたいなね、我々は持たなきゃいけない、奴らにやられるということになっていく可能性は凄くありますよね」

石田「ありますねぇ」

水島「うん」

石田「そうなると、イランもそうだし、イランがそうなると…」

水島「サウジです」

石田「そういうことですよ。これもねぇ、この討論番組で、確か何回か前に話したと思いますけど、サウジアラビアが今、喉から手が出る程、欲しいのは核」

水島「うん」

石田「それをトランプが、支援するなり、容認するかっていうのは、アメリカとサウジの一つのディールの材料になっている訳ですよね。トランプがやりたいのは、まずはイラン包囲網であって、イラン包囲網の第一段階が、第一期トランプ政権の時のアブラハム合意だった訳ですよ」

水島「うん」

石田「２０２０年８月にイスラエルとアラブ諸国をバンバン中東和平して、君達の敵は、アラブとかイスラエルじゃないだろうと。アラブとイスラエルは、手を取り合ってイランを包囲するんだよと。そうしたらイランの核開発の抑止にもなるし、イランが、しゅ～んとしちゃうから、そっちの方向に向かってアブラハム合意を結んでいたんですけど、きっと、それを、もう一度、やりたい訳ですよ」

水島「うん。そう」

石田「となると、サウジアラビアとイスラエルを何処かで国交正常化させる」

水島「うん」

石田「１０月７日以降に始まった、あのハマスに対するイスラエルの大虐殺、パレスチナに対する大虐殺からサウジアラビアの手を引かせた訳ですけど」

水島「うんうん」

石田「でも、そこを何処かで、もう一度、サウジとイスラエルの関係正常化っていうのをトランプは決めたいんじゃないかなと」

水島「そうするとね、私は非常に想像を逞しくすると、ネタニヤフが殺される事ですね」

石田「うん」

水島「つまりイランの面子が立つのは、これだけ全部、殺された」

石田「うん」

水島「だからネタニヤフ政権の中枢の人間を同じように殺すと」

石田「うん」

水島「まぁ、テロにしろ何にしろね」

石田「うん」

水島「或いは、あの極超音速ミサイルとかね」

石田「うん」

水島「というようなことになると、これで、もうやめようよと」

石田「うん」

水島「そうすると、トランプの言っている今のアブラハム合意も含めて、中東和平っていうのは、サウジを中心にして、お前もこっちはやめようみたいなね」

石田「あぁ」

水島「そういうような流れになって行くんじゃないか。だからミアシャイマーが言っていた、イランは核兵器を持つべきだっていうのは、そのあとの話もね、みんなで持ってやめようよというね、サウジが持って、イランが持って、イスラエルが持ってトルコも持って、これで大体、収まりがついちゃうっていうね」

石田「う～ん」

水島「良い悪いじゃないですよ」

石田「うんうん」

水島「だから多分、本当は、みんなが考えているのは、さっきＭＩ６、モサド、ＣＩＡが考えている時は、あれだけの突貫小僧みたいな形で、強引な人殺し迄やって来たネタニヤフさんを抹殺するっていう形で収めると、そこで、もう一応、無くなるんじゃないかっていうね」

石田「うん」

水島「ネタニヤフ政権の、例えばイギリスが何か二人、こいつは駄目だっていうのがあったじゃないですか」

石田「うん」

水島「ＭＩ６が認定したってなると…」

石田「制裁をかけましたよね」

水島「そうそう、そう。だから、こういう３人ぐらいをやるっていうのは何かねぇ、このイランも面子ということになるんだから、私は、そこまで、みんな、ロシアと考えてやっているんじゃないかっていう気がしてしょうがないんだけどね」

石田「もしも、そこまで考えてやっているとしたら、相当、テクニカルと言うか、まぁ、凄いなっていう感じですよね」

水島「ロシアとねぇ。あれはねぇ、トランプは意外と、みんな、失敗しただろうとか何とかね、中東和平は失敗したとか言われているけど、あれはプロレス好きだからねぇ」

石田「あぁ～」

水島「あのストーリー考えると一回、やられてね」

石田「うん」

水島「そうことも本当にやり兼ねない男だと思っていてね、これは、ちょっと想像を逞しくしているから、だから前に言ったように、意外と核兵器攻撃まで行くよって当てた自信があるから、私は、そこまで先にやっているんじゃないかっていう気もあるんだけど、これは、ちょっと極端に聞こえるか分かりません」

石田「いや、でも、いい読みですねぇ」

水島「うん」

石田「可能性として考えられなくもないかなと思いますけど」

水島「それじゃないとイラン人が収まりつかないというか」

石田「う～ん」

水島「イラン政府もね」

石田「うん」

水島「と言って、イスラエルを全部、抹殺する訳にもいかないし」

石田「うん」

水島「ということは、やっぱり、和平ですよ」

石田「う～ん」

水島「お互いに実利をやる為には、消えて貰わなきゃいけない人が居るみたいなね。恐ろしい話ですけどね」

石田「僕も、そぅいう意味では、水島社長と同じ考えを前々から持っていて、最終的に、あの戦争がね、ある程度、ひと段落がつくのは、やっぱりネタニヤフが逮捕されるか暗殺されるか何処かに亡命するかで、政権が替わるというところまで来ると大分、状況が変わるんじゃないかなと」

水島「うん、そうですよね。政権が変わったっていうのは、ちょっときっかけになるね」

石田「う～ん」

水島「まぁ、何処までやるかは別として、こういうことがあると思いますけど、ところで日本はサウジ的な知恵が無いでしょう」

石田「う～ん、何かねぇ…」

水島「あぁ～」

石田「もうちょっと政治家、総理大臣とかにリーダーシップがあればね」

水島「うんうん」

石田「日本が、イランとイスラエルの仲介役として手を挙げることは不可能じゃないと思うんですよ」

水島「そう。図々しく手を挙げてもいいんだよね」

石田「図々しく手を挙げたぐらいの方がいいと思いますね」

水島「無視されてもいいから。う～ん…」

石田「ただ今の総理大臣じゃ無理だと思いますけど」

水島「うん、ねぇ、そうだね」

用田「今の自民党じゃ無理ですね」

石田「自民党じゃ無理でしょうね。う～ん」

水島「(笑)」

用田「だから、結局、誰が立つのかによりますよね」

石田「はっきり言って、まず信頼されていないから、そもそも仲介役なんかお呼びでないと、ふっと蹴られちゃいますよね」

水島「うん。だから本当に安倍昭恵さんでも出兼ねないですよ（苦笑）」

石田「あぁ～」

水島「本当に。皆さん、戦争はやめましょうって言ってね（笑）」

用田「う～ん、まぁ、ただシナリオは、やっぱり、いくつかは当然のことながら、今の状況ではあり得ると思うんですね」

水島「はい」

用田「やはりネタニヤフが退陣しなきゃいけないというのは、全体を終わらせる為には、いずれイスラエルの中で捕まって刑務所に入れられるか、そうしなきゃいけないかもしれませんが、今の時点でやると、どうも、いや、いくつかの幅が当然、あるんですけども、イランが最後まで、核施設も含めてイスラエルを潰すという案も当然、上限としてありますよね」

石田「うん」

水島「そうでしょうね」

用田「もう一つは、臥薪嘗胆（がしんしょうたん）ですよ。国が崩壊するよりも基本的に、今、我慢して譲るものは譲って、もう核もつくらないということでやるんだけども、ただ黙っていないのは、やはりロシアと中国ですよね」

水島「うん」

石田「うん」

用田「ロシアにとっては、先程、申し上げたように、やっぱりＢＲＩＣＳの一員であると同時に、あそこは南北回路の要ですからね」

石田「うん、そうですね」

用田「そうすると、そうそうに地政学的に捨てられるかっていうのは難しい」

水島「そうですね」

用田「だからイランとすれば、今、臥薪嘗胆だけども、何年かしたら、ロシアもウクライナ戦争で、あと１年ぐらいで決着をつければ、基本的にイランの方を助けるということが出来るかもしれないですよね。それを期待して、今は臥薪嘗胆だという世界も…」

水島「うん。だから心情的に言うと、プーチンのロシアは、イランにシンパシーを持つでしょう。という気がするんですよ」

用田「トランプを含めて、トランプ以外にですか」

水島「そうじゃなくて、プーチンは、勝手に向こうが戦争に引きずり込んで来たっていう

ね」

用田「あぁ」

水島「やらざるを得なかったというようなことの心情を持っているので、それともう一つは極超音速ミサイルですよね。用田さんが最初に指摘したと思うけど、核兵器を持っていなくても、もっとスピードがあるものがね、いくらでも出来ると、イランでも可能性があるんですよね」

用田「うん」

水島「そうしたら、イスラエルを完全に破壊する核兵器に準ずるものを持つ可能性はあるでしょ」

用田「イランからしてみれば、そうだと思いますね」

石田「あぁ、オレシュニクみたいなやつですよね」

用田「そうそう」

水島「そういうこと」

用田「オレシュニクまで行くかどうか判らんけど、今、もう既に極超音速ミサイルを持っているからね」

水島「それとねぇ、いざ、そうなったらロシアが提供するとか脅すかも分かんないね」

用田「そこまでは、あるかも」

水島「イランを守るためにはね」

用田「うん」

水島「こういう、とんでもない…」

用田「ハードルは高いですけどね」

水島「そうですね」

用田「それは当然、考えてなきゃいけない話ですけどね」

水島「極超音速でねぇ」

用田「冒険だと思います」

水島「だから、今言ったように世界の流れの中でね、それと、中国は極超音速とかは未だ持っていないでしょ」

用田「極超音速は持っているんじゃないかな、持っていると思いますよ」

水島「あぁ…」

用田「基本的に今、ロシアから表立っては言わないけども、そういうものの技術は基本的に入っていますからね」

水島「あぁ」

用田「だって北朝鮮が持っているでしょ」

水島「北朝鮮が持っている」

用田「あぁいう国が持っているっていうのは、不思議じゃないですか」

石田「うん」

水島「ということは、これで一番大事なのはね、我々の国の、今迄、トマホーク４００発とかね、馬鹿じゃないのってなるでしょ」

用田「うん、役に立たないですよ」

水島「中国やロシアでドローンと極超音速がどんどん進んでいるじゃないですか。これ、旧態依然でしょ、我々の国の防衛装備というのは」

用田「はい。そうです」

水島「（笑）」

石田「うん」

用田「いやぁ、だから、今から無人機の部隊を創りましょうかっていう話をしているけれども、まぁ、そうは言っても凄い開きが、意識的な開きもありますよね」

水島「だからイランだって、自分でどんどん作っている訳でしょ」

用田「そうそう、そうそう。イランは技術力っていうのは相当、上ですよね」

石田「うん。この１０年間ぐらいで凄い技術力を上げたみたいですよ」

用田「上げたみたいですね。弾道弾も上げたし」

石田「そう、官民あげての軍需産業は、もう国策ぐらいの感じなので」

用田「もう無人機なんか、ロシアが欲しがるぐらいのレベルを持っていますもんね」

石田「そうそう、そうそう」

用田「だから、やっぱり技術力は凄いですよね」

水島「あとは、そうすると金が何処から出るかですね」

用田「そうですね」

水島「復興の為には、もう一回…」

用田「まぁ、中国が出すでしょう」

水島「中国、出しますか」

用田「金は」

水島「あぁ、なるほど」

石田「お金は出しますね」

用田「お金は」

石田「う～ん」

用田「あそこは、やっぱり、どうしても拠点が欲しいですからね」

水島「そうでしょうねぇ」

用田「ロシアも余裕があれば、そうするかもしれないし」

水島「これ、色んな要素があるけど、杉山さんはエネルギー専門だっていう感じで、そういうおっしゃり方があるけど、これをトータルで見て、この中東の問題というのは、地政学的に見ているとか、エネルギーだけじゃないものを持っているじゃないですか。宗教的なぶつかり合いっていうのがあるし、杉山さんは、この辺について、どう思いますか。今エネルギーが、さっき言ったように実利で一番、動いているベースになっているんでしょうけども」

杉山「実利で言えば、そうでしょう。さっきイランが臥薪嘗胆するっていう話ですよね。取り敢えず今、弾切れになったら攻撃する方も、あまり無くなるから、だけど正式な休戦まで至らなくても何となく、どっちも撃ち方やめみたいになる可能性はあると」

用田「だからイスラエルのコントロールを緊急な核施設を撃ち抜いたら、これは、大変な波及効果が…」

杉山「そこまでやるかどうかですよね」

用田「そうですね」

杉山「でも、今、そこまでやらないで臥薪嘗胆になってでも、そうしたらウクライナって、あの戦争は割と決着が見えている訳ですよね。決着しちゃったら、今度、ロシアはめちゃくちゃ武器製造能力がある訳ですよね。ストックもあるし製造能力もあるし…」

水島「うん」

杉山「それ、何処に向かうかって言ったら、凄く自然にイランの方に流れていくと思うんですよね」

水島「なるほどね」

杉山「イランは油もガスも資源を売ることがあるので」

水島「あぁ、そうかぁ。あとで払ってくれるから、金は大丈夫だ」

杉山「資源は、もう、みんなロシアに譲り渡してでも、武器はガッと凄く短期間に、一気に増強する事はあり得ると」

水島「ということは、それにプラス…」

杉山「そうしたら本当に、もう一回、やったらどうなるか分からないっていう状態になる

かもしれないですね」

水島「そうですね」

石田「本当にそれがあるから、建て直すのが早いという見方が多いのかもしれないですね」

水島「あぁ、なるほどね。うん。鈴木（傾）さんは、どうですか」

鈴木（傾）「私は、ネタニヤフが多分、保身に成功するんじゃないかなぁという風に見ているんですよ」

水島「うん。あぁ、自分のね」

鈴木（傾）「えぇ」

水島「うん」

鈴木（傾）「自分の保身には成功すると思います。この理由としてあるのが、ジャレット・クシュナーっていう人が居るんですね」

水島「うん」

鈴木（傾）「これは誰かと言うと、トランプの娘さんのイヴァンカの旦那さんです。このジャレット・クシュナーって人はユダヤ系で結構、お父さんも力を持っているクシュナー一族で、結構、力、持っています」

水島「うん、クシュナー一族ね」

鈴木（傾）「ネタニヤフがアメリカに来た時に何処に泊ったかと言うと、このクシュナーの自宅に泊っているんですよ」

水島「あぁ〜」

鈴木（傾）「要するに、そのぐらい仲が良い訳ですよね」

水島「うん」

鈴木（傾）「ネタニヤフ自身は、ちょっとビジネス的には凄い色々悪い事もお仕事とかも色々あったりするんですけども、その背後にクシュナー一族も居る訳ですよ。一緒にビジネスしている訳ですよね」

水島「うん」

鈴木（傾）「イヴァンカの旦那さんだから、トランプから見ると身内みたいなもんですよね」

水島「身内だよね」

鈴木（傾）「えぇ」

水島「かなり近い身内」

鈴木（傾）「かなり近い身内ですよね。その身内がネタニヤフと一緒に組んで、ビジネスも

やって、イスラエルに非常に深く潜り込んで来ている訳ですよね」

水島「うん」

鈴木（傾）「そうなるとジャレット・クシュナーの存在からすると、じゃあ、ネタニヤフを暗殺するとか失脚させるとか、そういうことをするかなぁというのは個人的に思うんですよね」

水島「うん」

鈴木（傾）「だからネタニヤフ自身は恐らくこのジャレット・クシュナーの人脈を使って、トランプを動かして生き残るんじゃないかなぁっていう風には思っているんですよ」

水島「う～ん、なるほど」

鈴木（傾）「えぇ」

水島「この辺のところがね、結構、キツイ、身内でもどんどんやっちゃっているところもあるしね」

鈴木（傾）「まぁ、そうですね」

水島「だから、その辺のところは、どっちになるかですねぇ」

鈴木（傾）「あのう、だから、そこにビジネスも絡んでいて…」

水島「そうですねぇ」

鈴木（傾）「お金も絡んで来ているので」

水島「う～ん」

鈴木（傾）「どうなるかですね」

水島「面倒臭い奴は消せみたいなところがあるじゃないですか」

鈴木（傾）「うん」

水島「エプスタインみたいなね、あぁいう事件もあったし。稲垣さん、この問題についてはどうですか」

稲垣「はい、まぁ、難しい問題で中々よく分からないところがあるんですけど、やはり、トランプ大統領としては、殺さずでも収められるとなれば、殺さないし失脚もさせない可能性もあると思いますけど、やっぱり、これだけ国際的な非難が集まっているとしたら、それは中々収まりがつかないので、何らかの形で失脚しないと収まりがつかないんじゃないかなぁとは思っています」

水島「なるほどねぇ。結局、私はイギリスというのは一番、強かな奴らという、スターマー（Sir Keir Rodney Starmer）ですか、あの首相が、極右と言われるイスラエル内閣の閣僚を名指しで制裁するっていうことをやったっていうのは、何らかの合図だろうというね。

だから、私はシナリオライターだから、直ぐヤクザ映画のストーリーで言うとね、所謂、

突貫小僧と言うか鉄砲玉みたいなのが散々やって、あとは、どう終息するかっていうのが大体、ヤクザ映画の筋書きですよ。どうやって手打ちするかとか、結構、実は、色んな事を当てているという（笑）、そういうイメージのね（笑）、本当に欲望と金という流れで見ると、そういうヤクザ映画のストーリーっていうのはねぇ、映画って言うか、そういう世界だと思っているんですねぇ。

ゴッドファーザーもそうだし、所謂、マフィアとか犯罪組織というのは、やっぱり最終的には命と金っていう、国の流れも違わないっていうことになると、邪魔になった奴が消えてくれれば、みんな、幸せみたいなね（苦笑）、そういうことを本当にやり兼ねないと思っていましてね。

ただ、そこのニュアンスが、私は、日本の政府の政治家、殆ど国会議員全部にそういった厳しい世界だよというねぇ、安倍さんの死を見て岸田が真っ青になってね。涙を流したっていうのは、悲しくて泣いたわけじゃなくて、こんな世界なのかと改めて自覚したみたいな感じの顔だったっていうイメージがありますけど、やはり犯人と言われる人がやっと３年で間も無く秋に法廷に出て来るみたいなね。凄い話ですよ。あの事件が３年も経たなきゃ法廷に出られないっていうね。

こういう世界だというね。安倍さんは、まともに普通に、ただ偶然に暗殺されたみたいに思っている奴は、殆ど居ないと思うんですけどね。ケネディ大統領もそうだったし、やっぱり、こういう具体的な生々しいテロリズムというか、こういったものも、実は、もう今、現代社会っていうのが一番、凄くなっているんですかね。用田さんね、ＭＩ６、ＣＩＡ、モサド」

用田「（頷く）」

水島「ここまで、いや、私は結構、スパイ小説とかね、ケン・フォレットとか、色々結構、読んでいるけど、サマセット・モームもイギリスのスパイだったけど、のんびりした牧歌的なスパイだった。今、凄いですよね」

用田「まぁ、それが表に出て来たっていうことですよね」

水島「うん」

用田「今迄も凄かったんでしょうけど」

水島「そうでしょうけどねぇ」

用田「我々が知らなかった。知らないこと、いっぱいあるんですけども、しかし実態が、そこにあるというのは大変な強敵ですね」

水島「はい。そうですねぇ」

用田「基本的に、我々はどうしようもないですけどね（失笑）」

水島「いや、まぁ、そういうことがあるので、これはＡＩとかね、電子的なものを使っているっていうね。この辺がちょっと緻密になっていると思うんですけども。はい。というようなことで、今日は、もう時間になりましたので、じゃあ、纏めを戴きましょう。用田さんから、一言ずつで宜しくお願いします」

用田「まぁ、纏めにはならないんですけども、大分、イランの話の方に特化しましたけど、一つだけ言っておきますと、人類の本当の危機とは一体、何だろうなと考えた時に、こういう言葉があるんですね。グローバリストは戦争、公衆衛生、災害などを好機と捉え、だから『惨事便乗型＜ショック・ドクトリン＞』と言うんだそうですね。ショックを与えて、グレートリセットしちゃうと」

水島「うん」

用田「だから我々が今、イランのことを見せられたり農業のことを見せられたり、日本の中で言えば、そういうエネルギーのことを見せられたり、それは一つ一つ大変ですけども、それが全部、繋がっていて、それは、とんっと我々にショックを与えて緊急事態法とか、最後は、そこに集約するんじゃないですか」

水島「そうですね」

用田「緊急事態法に集約して、だから我々から言うと、有事には緊急事態法は絶対に居ると思っているから、それを、ずぅっと賛成したんだけども、しかし今、自民党が言っている事は違うんですよ」

水島「違いますね」

用田「だから全く違うコントロールをしようという、ショックを与えてグレートリセットするという。だから、その中で、我々が本当は凄いけど、見えてない部分は情報とかデータとかＡＩを独占して人体・精神を占拠・支配する」

水島「うん」

用田「そして新世界秩序をつくると」

水島「そっちへ進んでいますよね」

用田「よく言われる、このトランス・ヒューマニズムって言うんですよ」

水島「うんうん」

用田「アメリカのですね、ちょっと心配なのは、色んな公衆衛生だとか国防だとか、そういうやつをパランティア、私、勉強が足りないんですけど、パランティアっていう会社があるんですか。パランティア」

鈴木（傾）「はい、パランティアですね」

水島「パランティア、うん」

用田「パランティア」

鈴木（傾）「はい、パランティア」

用田「ここが色々なそういうデータを握ると」

水島「うん」

用田「そういう契約を結んだという報道があった気がするんですよ」

鈴木（傾）「パランティアは昔から政府に対してのビジネスをやっていて、今、ＡＩが凄くブームになっていますけど、このＡＩが流行る、ずっと前から、もうＡＩをやっていたんです」

用田「はい」

鈴木（傾）「そのＡＩによって莫大な情報、例えば、色んな信号とか衛星の画像とか」

用田「はいはい」

鈴木（傾）「或いは色んなチャットとか」

用田「はい」

鈴木（傾）「電話の内容とか、そういうのを全て総括して、この莫大なビッグデータの中から、システムを持って何が起きているのかっていうのを拾い出すんですね」

用田「だから世界経済フォーラムが最終的に言っているのは、基本的にはデータを握った人間が人類を支配するんだと」

一同「うん」

鈴木（傾）「そうです。アレックス・カープっていう人間が今、それをやっている」

用田「やっているんですねぇ」

鈴木（傾）「はい」

用田「だから、それが基本的に、勿論、一つずつでも大変ですよ。あのエネルギーの問題も農業の問題も全部、でも大変だけども、抱き合わせて目に見させないようにしているのが情報データ、ＡＩを独占するというね」

水島「そうですね」

用田「だから、それが人間の身体と一体化していくという、例えば、パランティアが善で、或いは、グローバリストだとか世界経済フォーラムとか、こういうやつが悪だと言っているけど」

水島「うん」

用田「その境目があまり無いですよね」

水島「あぁ、そうだよね。それはありますね。はい」

用田「だから、我々は、マイナンバーカードなんてやって紐づけさせようとする、あれも、どんどん、やらせようとしているじゃないですか。健康保険証とかもね」

水島「はい、そういうことです」

用田「だから、そのデータを全部、握らせられる訳ですね。今、何とかウォッチ、健康ウォッチ、あっ、それ、そうですか」

鈴木（傾）「アップルウォッチです」

用田「それで、この話していることが全部、出ているかも分かりませんね（笑）」

鈴木（傾）「あぁ…」

用田「いずれにせよ、そういうアプローチで全部データが集積されていく訳ですよね」

水島「うん」

用田「そうすると人種別だとか、別で色々なことが判って来るということになるので、もしかしたら意外とそこは隠されたまま、ずぅっと進んでいるのかなというのが心配です」

水島「そうですね」

用田「真面にはなりませんけども」

水島「でもＭＩ６、モサド、ＣＩＡが一番、それを使ってやってビッグデータの中から色んなやり方とか政治の方向とか、工作戦略みたいなのを作っている可能性が凄くあると思いますよね」

用田「そうですね」

水島「やっぱり将棋をＡＩとやると最終的にはＡＩが勝つと言いますけど、実際、本当にそういう時代が来ましたね。はい。鈴木傾城さん、お願いします」

鈴木（傾）「はい。ＡＩですけど、ＡＩは国防です」

水島「うん」

鈴木（傾）「これは明らかに、国防に直結する技術ですね」

水島「はい」

鈴木（傾）「色んな便利なチャットが出来ますと。自分が聞いたことを答えてくれますとか計算してくれますっていうのは枝葉の枝の部分で、幹は何かと言うと、これは、もう本当に全世界のビッグデータを全部、収集して、そこから一瞬にして必要な答を出すっていう国防ですよね。だから、そのＡＩを否定するっていうのは、国防を否定するっていうことに繋がっている訳ですね」

水島「うん」

鈴木（傾）「一つ重要なのは、このＡＩっていうのはデータセンターが必要ですけど、このデータセンターというのは、物凄くメチャクチャに電力を食うんですよ」

水島「そうみたいですねぇ」

鈴木（傾）「メチャクチャ電力を食うんです」

水島「それで原発を造る奴が居るっていうもんねぇ、これねぇ、はい」

鈴木（傾）「そのデータセンターというのは、その場所が重要で、そこを握っている、そのデータセンターを握っている企業と場所が、これから世界を支配する訳ですよ。そうなると日本にデータセンターが全然、無い。そのガバメント、政府がやっているデータセンターも全然ないっていうことは、日本が、もう次の、そのう…」

水島「時代の…」

鈴木（傾）「もう国防を諦めたっていうのと同じで」

水島「あぁ～、そういうことか」

鈴木（傾）「えぇ、だから本当にデータセンターを動かせるぐらいの電力が必要な訳ですね。この電力は何かって言うと、今、アメリカで動いているのは原子力ですね」

水島「そうですね」

鈴木（傾）「はい。で、それで…」

水島「原発を、また造るって言っていますもんね」

鈴木（傾）「そうですね」

水島「う～ん」

鈴木（傾）「もう太陽光発電なんかやっている場合じゃなくて、石油もガンガン、もう掘って、掘って、掘りまくれみたいな話になっていますし、原子力もどんどん造りまくれみたいな話になっている訳です。ここ１～２年ぐらいで何が起きているかって言うと、その小型原子力を造る会社、例えば、オクロとか、そういう新興の原子力の会社がメチャクチャ伸びて来ている」

水島「あぁ」

鈴木（傾）「ところがオープンＡＩのサム・アルトマンっていう人が、オクロっていう原子力の会社共同経営者だった」

水島「うん」

鈴木（傾）「何故かと言うと、原子力は人工知能のデータセンターには絶対に必要で」

水島「うんうん、うん」

鈴木（傾）「これからのＡＩの発展には絶対、必要だから原子力を推すんだっていう意味で、サム・アルトマンはオクロという会社の幹部だった訳ですね」

水島「うん」

鈴木（傾）「このオクロっていうのは、今、もう、そういう状況の中で、ここ１年で株価が４０％とか５０％も上がっている訳ですよ」

水島「あぁ～」

鈴木（傾）「原子力の時代が今、正に来ている訳ですよね。その原子力の時代っていうのは何かって言うと、ＡＩの時代ですよ。今度、ＡＩっていうは何かと言うと、国防な訳ですよね。今、日本はそこのところをないがしろにしているんで、じゃあ、もう日本は次の世代で生き残る気が無いのかっていう、そこまで来ていると思います」

水島「全く、そうでしょうねぇ」

鈴木（傾）「えぇ」

水島「えぇ…」

鈴木（傾）「原子力っていうのは凄く大切ですよね（微笑）」

水島「はい。今のことは丁度、前に経済討論で議論した時ね、やっぱり言ったんですよ、そういうＡＩとか発達して来て、それでデータも理論も思想もね、そういうものが全部出て、それで、じゃあ、ここの国って、まぁ、日本なら日本の国の最良の経済政策は今の時点で何だって言ったら、本当は出るはずですよね。財政出動すべきだとかね。やられちゃうと困る奴が居るっていうね」

鈴木（傾）「う～ん…」

水島「でもデータセンターを造ろうとしていないとか、ないっていうのは、そういうことですねぇ」

鈴木（傾）「そうですね」

水島「ね。う～ん」

鈴木（傾）「まぁ、今、色んなところに造ろうとしていますけど…」

水島「うん」

鈴木（傾）「でも電力が無いっていう根源的な問題があって、そこで止まっていますねぇ」

用田「データセンターっていうのは、東京とか大阪で造るという話は…」

鈴木（傾）「北海道とかですね、今、熊本にもありますけど」

水島「あのラピダスっていうのはねぇ、それに代わるものなのかしら」

鈴木（傾）「ラピダスっていうのは半導体企業であって」

水島「半導体だよね」

鈴木（傾）「えぇ。その半導体を造る為にデータセンターも必要だって言うんですけども、ＡＩを作っている訳じゃないので、ラピダスは、また、ちょっと別の観点です」

水島「あぁ～、やっぱり、それじゃあ、あまり希望が無いね」

鈴木（傾）「えぇ」

水島「あれは泊原発を使うって言っているからね」

鈴木（傾）「えぇ」

水島「はい。解りました」

鈴木（傾）「はい」

水島「杉山さんは、どうですか」

杉山「斬首作戦って、あんなに大当たりしたっていうか、軒並み斬首作戦で最初にやられるというのは、歴史上、初めてじゃないですかねぇ」

用田「そうですね。あれだけのものは無いですね」

杉山「あれも、おっしゃったように正に電子技術とか発達したっていうのも当然、あるんでしょうけど、とにかく世界はこういう所ですよっていう認識が今、日本中、全然無くて、特に経済産業省には無くて、だから世界で仲良くＣＯ２を減らすんですっていう話を一生懸命やっていて、その為の予算とか権限とか、いっぱい出来ちゃったから、みんな、そこに群がっているんですよね」

水島「うん」

杉山「それが現状ですと。だけど国っていうことを考えると、やっぱりＡＩもそうですし、でも、それ以前に今、アメリカで鉄を買収で来たって喜んでいますけど、よく考えたら、あれは日本のお金を持って行ってアメリカに投資する話でね」

水島「そういう話ですよね」

杉山「あれは産業空洞化ですよ（苦笑）、そういうことが、もう…」

水島「向こうにとっては、いいんですけどねぇ」

杉山「だからＡＩに行き着く以前の、これまで日本に蓄積されていた産業も、どんどん、国内で投資をしなくなっているんでね。これを直すのは、やっぱりエネルギーを安く供給するっていうのは当然のことで、原子力もそうですし、火力発電所も石炭もガスも、きちんとやれば、日本は安い電気を供給できますから。台湾だって殆ど条件は同じで、殆ど全部、輸入と原子力で賄って来て、それで世界一の半導体工場の集積をつくった訳で、日本でやれないはずがないですよ」

水島「うん」

杉山「だけど日本が一生懸命やっているのは北海道に風力発電所を並べますとか、北海道に太陽光パネルを並べますとか、どんどん電気代が高くなるような話ばかりやっていて、しかも中国製のものを買っているし、一体、何をやっているんだ」

水島「そうですねぇ」

杉山「もう、これは叩き直さないと、本当にエネルギーって製造業の根っこでもあるんでね、その意味でも安全保障の根幹、ＡＩも勿論、アルトマンも言ってましたけども、最後はエネルギーで決まるんだと」

水島「そこですね、本当に、今、見てみるとＡＩとエネルギーですよね」

杉山「ＡＩを動かすエネルギーをどれぐらい持っているかで勝負ですよね」

水島「これを押さえた奴が勝ちだっていうね」

鈴木（傾）「そうですね」

水島「うん。何か釧路湿原でやっていた、あれは、さすがに釧路市長が釧路湿原の太陽光パネルはやめるって…」

杉山「あぁ。脱メガソーラー宣言みたいなことをしていましたね（失笑）」

水島「そう（笑）、２０万枚もやっておいて遅いんだよっていう噂もありますけど」

杉山「あれも宣言はしたけど、何か強制力はありませんとか、よく分からないことをおっしゃっていました（苦笑）」

水島「そんな話も出ていましたけど。はい、じゃあ、石田さん、お願いします」

石田「はい。今日は色々とテーマが出ましたけど、日本が直面する課題ということで色んなお話をしましたけど、これらのお話って、実は、今日、話を振り返ってみると、全部、国民生活に凄く近い部分にあるんですね」

水島「あぁ、そうですね」

石田「だから実は本来一人一人が真剣に考えなきゃいけない問題ですけど、今日、冒頭で始まったのが、まず食糧の話でしょ」

水島「うん」

石田「それでエネルギーとか移民の話もそうだし、言論統制も今、進んでいますしね」

水島「うん、そうですねぇ」

石田「増税もそうだし、その向っている本質的なものは、実は日本国民がどんどん貧しくなるようなテーマばかりですよ」

水島「うん」

石田「そう考えると、やはり色々とアイデアも出していくべきだけど、でも、用田さんがおっしゃったように、もう、みんな、思考停止だから、国民も良くないと思うけど、国会議員なんか、もっと思考停止でしょ」

用田「反対に進んでいますよ」

石田「反対に進んでいますからね」

用田「（微笑）」

石田「何の違和感もなく、その反脱炭素」

水島「うん」

石田「何か反脱炭素に賛成する人が殆ど居ないっていう話じゃないですか」

水島「うん」

石田「要は、国会議員とかも何も考えずに脱炭素の方に向かっちゃっている訳じゃないですか」

水島「そうそう」

石田「これとかって、国会議員がただ単に勉強不足なのか。それとも誰かの圧力で、やっぱり、そう動かざるを得ないのか。どっちでしょうね」

杉山「まぁ、圧力もあるし」

水島「両方あるんですか（笑）」

石田「両方」

杉山「元々メディアって、何か資本主義に反する様なことが好きじゃないですか」

石田「あぁ～そうですよね」

杉山「だから、あのグリーン・グリーンっていうのとかは、メディア受けが良くなりますよね」

石田「う～ん」

杉山「利権も当然、あって…」

石田「あるでしょうねぇ」

杉山「役所でも法律を作れば、いっぱい企業が動いていますからね。口をきくチャンスも、いっぱいありますからね」

石田「要は、今だけ金だけ、自分だけ」

杉山「自分の目先のところでは、みんな、利益を上げているんだけど、国全体としては、もう沈んでいるっていうことですよね」

石田「う～ん、そうですねぇ」

杉山「本当は国会だったら、そこに思い至さなきゃいけないんだけど、そういうことは、考えていない」

石田「う～ん。今日の杉山さんのお話とか聞くと、一刻も早く純国産エネルギーに着手していかないと、もうヤバいんじゃないかなって思うんですけど」

杉山「準備ですね」

石田「でもガスも石油もメタンハイドレートも全部、いつまで経っても何十年も試掘段階とかで、中々商業生産に切り替えられないということがあるじゃないですか」

水島「うん」

石田「だから、そういうのを、例えば、何処かに３兆円、４兆円のお金をウクライナの方へ払うんだったら、そんなもの全部、メタンハイドレートにボワァ～ンとぶっこんでやっちゃうとか、石油もガスも純国産を少しでも増やすとかね、そういうことに向かっていって欲しいなと、僕は思うんですけどね」

水島「そうですよ」

石田「純国産エネルギーをつくることとかね」

杉山「基礎研究はね、よくやったらいいと思うんですけどね」

石田「う～ん」

杉山「お金をどぉ～んと付けると言うと、また何か怪しい方向にどぉ～んと付いちゃう訳だから（笑）」

石田「うんうん、うん。まぁね、やり方は色々あるんですけど、それと、やっぱり目先は増税ですよ。国民をこれ以上、貧しくしてどうするんだっていうね」

水島「これは露呈していますからね」

石田「そうそう、そうそう」

水島「消費税から何からね」

石田「まぁ、消費税は勿論、廃止一択だし」

水島「そう」

石田「消費税が日本国民の正規雇用を非正規雇用に切り替えてきたという方向性で３０年間、ずっと来ちゃっていますからね。僕も、やっぱり消費税の申告書とか沢山の会社の分を作っていましたけど、２０代、３０代の頃、消費税と法人税を担当する税務の実務に携わって来たんですけど、もう何かお金が無いのに、消費税の納税額が５００万、６００万なんて会社が世の中に、いっぱいあるんでね」

水島「いや、ほんと、そうなんだ。あれって突然、来るんだね。突然って言うか、まぁ、来るのは来るんだけど、纏まって来るから、うちなんかも本当に大変ですよ」

石田「それで決算の時になって、いきなり税理士からね、お宅の会社の納税額は５００万円ですよぉとか言われるんですよ。えっ、うちの会社の預金ゼロだよ、殆どゼロだよって言うのに」

水島「（笑）」

石田「いや、月末までに払って下さいってなるじゃないですか」

水島「いや、そうなんだ」

石田「だから、みんな、消費税を納める為に銀行へ行って、お金を借りて、それで納税をするって、こんな、馬鹿げた話があっちこっちにあるんですけど、そもそも、それで中小企業も重税下に耐えられない訳ですよ」

水島「いやいや、もう本当に憎悪に近いぐらい腹立っているけどね」

石田「そうですよね」

水島「私なんか本当ね、うん」

石田「やはり、それだけ、むしり取られるから結局、人件費に回すことも出来ず」

水島「う～ん」

石田「もう本当にバタバタ潰れるし、消費税だって税目の中で、一番、延滞率が高い税金ですから、そもそもの応能負担原則に多分、反している訳ですよ」

水島「そうですよ」

石田「負担するべき、負担できる人が負担しましょうという、その税金のそもそものコンセプトから全然ずれていて、負担できない人が負担をしている」

水島「うん」

石田「正規雇用は非正規雇用に切り替わるから国民がどんどん貧しくなって、貧しいから結婚できないし、結婚どころかデートに行くお金すら無いみたいな、そういう若者もいっぱい出て来るし、結婚しないから勿論、子供だってつくれないし…」

水島「うん…」

石田「まぁ、少子高齢化に直結している税金でもあると思うんですよね。ちょっと、ここでご案内ですが、そんな税金を皆さんに少しでも詳しく知って戴きたいということで、こちら『増税地獄』という書籍が６月２７日発売ですけど、これは、こちらにもチョコチョコ出て戴いている安藤裕さんと共著で、今度、発売するんですが、基本的に『消費税廃止一択！』ですけど、日本人が、いかに政治家とマスコミに騙されて来たか、消費税という税金が、いかに嘘で塗り固められた税金かというのを、出来る限り解り易く伝える為に書いた本です。皆さん是非、こちら６月２７日発売前にＱＲコードから予約戴くと、石田和靖と安藤裕の特別限定動画、経営学としてプレゼントしますので」

水島「はい、なるほど」

石田「ここに居る皆さん、是非、予約をお願いします」

一同「(笑)」

水島「はい」

石田「用田先生、５冊ぐらい、お願いします」

一同「(笑)」

用田「これ、使い切らんのですよ」

石田「え？」

用田「あれを使い切れない」

石田「あぁ、ＱＲコード？」

用田「ＱＲコード」

石田「じゃあ、あとでスマホ、貸して下さい。僕が入れますから」

一同「(笑)」

水島「これは本当にその通りでね、『増税地獄』って、ぴったりだね」

石田「本当に、この国は『増税地獄』ですよ」

水島「これはねぇ、本当に、こんな酷い政府は、昭和２４年生まれの私だけど、ほんと、経験したこと無いと思いますよ」

石田「これね、増税地獄…」

水島「どんどん、どんどんねぇ、国民から収奪して増税を増やしていくというね、もう、これは悪徳代官どころじゃないねぇ」

石田「言い換えると、国民に対しての経済制裁をやっているようなものですよ」

水島「いやいや、そう」

石田「政府が」

水島「それもね、だから、用田さんがおっしゃったようにクラゲにされているでしょう。クラゲにされているっていうことで、私が唯一、希望を持つのは、こういう本を読んでね、これは怒りですよ。こいつだけは許せないという怒り、もう生理的な憎悪や怒り。腹が減ったとかね、こういうものしかない、もう立ち上がるものが無いんじゃないかってね」

石田「うんうん」

水島「だから、みんな、本当に怒っていますよ」

石田「怒っています、怒っています」

水島「腹が立っていますよ。だから、これをいい方向にねぇ、政府は、ちょっと痛い目に合わなきゃいけないので、この進次郎を見て喜んで、あいつも中々よくやっているんじゃないのなんて言ってんじゃねぇよと」

石田「う～ん、もうねぇ、騙されるのはやめましょう」

水島「ね」

石田「ね」

水島「それだけは言いたいね」

用田「日本人による、日本人の弱体化政策」

石田「そう」

水島「はい」

用田「それを、ずっと自分で自傷しているっていうか、傷つけているというか」

水島「う～ん」

用田「傷つけているより、心臓を刺しているかもしれない。この両方ですね」

水島「みんな、本当に心不全を起こしますよ」

用田「未だエマニュエル総督のあれが残っているんじゃないですか」

水島「次の大統領選挙に出るって言っていますからね」

一同「あぁ～」

水島「やっぱり総督だったですからね」

石田「エマニュエルは今、アメリカで絶賛、売り出し中ですもんね」

用田「じゃあ、日本が５１番目の州になるんだ」

水島「はい。じゃあ、稲垣さん、お願いします」

稲垣「はい。今、お話を伺っていて、中東の混乱というか、これが続くか、激化したら、今度は東アジアが危ないと…」

水島「あぁ、そうだね」

稲垣「まぁ、ちょっと思っています」

水島「はい」

稲垣「最近の韓国の状況でも今年に入ってから、尹大統領の戒厳令に始まり、ずっと罷免されたりとか混乱が続いていましたけども、今回の選挙で演説が中国語で行われていると」

水島「そうなんだねぇ」

稲垣「結局、この実態は一体、何だったかというと、中国の乗っ取りに対する抵抗であったと」

水島「うん」

稲垣「その政治混乱が、正に今の日本が直前ですよね。今回の参院選でも多くの帰化した人が出ようとしているという話が色々話題に出ていますし、やはり、これは日本と韓国が今、本当に危ない状況にあるんじゃないかなぁと思っていて、大変、危惧しています」

水島「はい」

稲垣「やはり、その先には有事ですね。中国による有事が発生して、国防動員法によって、結局、為す術もなく乗っ取られるっていうようなことを想像してしまう訳ですけども、本当にそうなったら、先程から話が出ていたエネルギーの問題も、食糧の問題も本当に一気に破局になって突き進んで行ってしまうんじゃないかっていうことで大変、心配しています。

まぁ、そうですね、来月、参院選があって、今、出来ることって言ったら、結構、色んなところが反グローバリズムで立ち上がっていますけども、一つになれていないので、やはり今の既存政党の勢力を削ぐっていうところぐらいまでしか、出来ないんじゃないかと思いますけど、これは是非ともやらなければいけないことですけども、これから、色んな形で反グローリズムの大連合っていう形でやっていかないと、もう日本はもたないどころか、小泉進次郎が総理大臣にでもなったら、それこそ日本 The End じゃないかっていう風に、思っています」

水島「はい」

稲垣「それで連合で一大眼目として、やはり消費税廃止、そして反グローバリズムで一致できるところとして、大量移民政策の反対、そしてＷＨＯが勧める注射反対。そして、も

う一つ付け加えるなら、やはり米の問題、米の増産、そして進捗の自給率のアップに取り組まない政治家達は落選させるというところで、段々連合を創っていくしかないと思っています」

水島「そうですね」

稲垣「ちょっと歴史を遡って見たら、先程から色々お話があって、明治維新には色々と欠陥と言うか廃仏毀釈は、やっぱり、やり過ぎでしたし、あとは、明治６年の征韓論の政変、征韓論破裂から、やはり啓蒙使節団で帰ってきた連中が欧化政策を進める方向に舵を切ったっていう問題で、やはり明治維新の軸がぶれてしまったっていう問題がありますけども、やはり、そこまでは、しっかりとした軸があって、やはり幕末の段階で水戸学とか国学、儒学という形で思想的準備が出来た中で幕末の王政復古というのが起きたので、やはり、そこでも志を持った雄藩が志士達の指導力によって大連合するという形で幕府権力を相対化し、天皇陛下の下に俊才を集めて一つの中央政府を創って行くっていう流れが出来ましたので、やはり、こういった成功例を色んな意味で、もう一回、教訓として汲み取って、我々はその大連合に向けた動きというのをやって行かなければいけないと思います。

そして、やはり、それはトランプ大統領が国民の支持を得て、ようやく、あそこまで出来ている事を考えると、国民運動で一人、二人の議員を出すだけじゃなくて、国民運動を背景にした、そういった形での運動をやって行かなければいけないんじゃないかということで、農業に取り組むのもそうですし、とにかく本当のことを伝えていくいことによって、国民運動を起こしていくと。

現場でやっている者から見て、やはり４～５年前にやっていた時は殆ど１００％近い人に無視されていました。無関心の壁と戦っているような状況でしたけども、去年ぐらいから徐々に変わってきていて、やはり国民が何らかの形で不安を感じていたとか、被疑感を感じているっていう形で、少しずつ変化が感じとれるようになって来ています。手応えも感じているし、また国際情勢でも、やはりロシアが日本の保守派に関心を持っているような感じもありますし、決して悲観的な要素だけではないと僕も思っていて、だから一個一個、日本の底力を信じて、国民に訴えるという形で運動をやっていきたいと思います」

水島「今、言ったように幕末の問題、私は西洋近代主義の批判が専門だった訳ですけど、でも先程、用田さんからも提起された様に、我々の明治以降の近代化っていうものを、もう一回、きちっと見なきゃいけないし、それと同時に一番、視点がどんどん変わる、違う視点が今、出て来たのはいいことだと思います。

例えば一つ言うと、夫婦別姓というのが今日、ちょっと出ましたけど、武士の家というのが、非常に血縁的な形で繋がっているっていう風に、我々も思っているし、思って来たけれども、実は、星新一っていう人の書いたものを、たまたま知る機会があった。あれは、もっと違うと。飯を食う種をしっかり保つ為の会社的なものだったと。何とか家とかね、水島家とか石田家とかね、鈴木家っていうのは、そういうものだっていうのを、もう一回、ちゃんと見直さなきゃいけないと。

だから、さっき、ちょっと言った忠臣蔵の問題も、色んな心情的な血縁関係の中で繋げていかなきゃいけないっていうもので、だから、所謂、皇室の在り方と武家や商家の違いは、養子だろうと何だろうと、優秀な奴を連れて来て、とにかく存続させるんだと。もっ

と言うと、極めて近代的なって言うか、非常にドライなところがあるシステムだったと。日本の家というのはね。だから嫁さんが封建制度に入って色々大変だとか、勿論、そういうのはあったし、明治以降は、特にそういうのが強調された小説は多いけれども、実は江戸時代までのあれは極めて明るいというか、そういう繋げるっていうことが凄く大事なシステムでもあったということがあるっていうのを、最近、その星新一さんっていう人、もう亡くなっていますけど、ＳＦ作家ですけど、面白い見方するなぁと感じました。

そういう意味では、今日、色んな視点を、皆さんから戴きました。色んな形で想像力を逞しくして、前へ進んで行きたいと思います。決して諦めないっていうことであります。今日は有難うございました」

一同「(礼)」

＊＊＊＊＊＊　お　わ　り　＊＊＊＊＊＊